2
東書
小国610

文部省検定済教科書

柳田国男編

新しい国語

六年 下

T1A7
1K9
2

教科
34
013

60336
教科書文庫
6
810
ヲ-1949
01304
49023

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449923

昭和二十四年十月十日 文部省検定済
小学校国語科用

新しい国語

六年 下

広島大学図書
0130449923

東京書籍株式会社

中央図書館

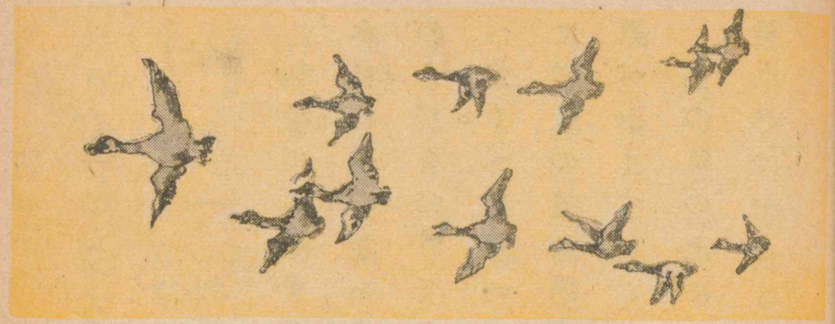
広島大学図書
0130449923

もくろく

一　ふるさとの秋……四
(一)　利根川のせの音
(二)　北国の秋
(三)　小柿

二　私たちの図書館……二十七
(一)　私たちの図書館
(二)　書物の話

三　作られるまで……五十四
(一)　茶
(二)　紙

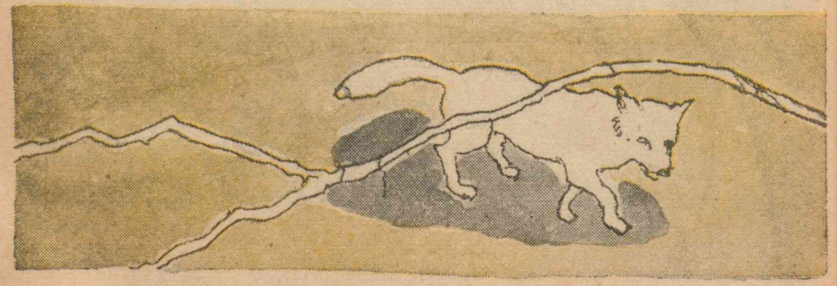


四　美しさを求めて……七十八
(一)　玉虫のずしの物語
(二)　おかぐらのふえ

五　人間とことば……百二十三
(一)　方言と標準語
(二)　新しいことばと外来語
(三)　学生のことば

六　新しい世界……百三十八
(一)　先生の手紙
(二)　心に太陽を持て

ふろく　新しく出た漢字……百五十一
勉強の手引……百五十二



一　ふるさとの秋

(一)　利根川のせの音

利根川にそうて続いている雑木林、道のないその雑木林の木のえだを分けて、どんどんおくへおくへとはいって行くと、急に学校の運動場ぐらいの広い草原へ出ます。

その草の上にこしをおろして雑木林にかこまれたせまい空を

見ると、空はどこまでも青く明かるく高いのにおどろきます。足もとには秋草の花がいろいろにさきみだれて、どんな小さな花でもみんなそれぞれにおどろくほどの美しさを示しています。だれかが「春の花はあまいにおいがする。秋の花はすっぱいにおいがする。」と言いましたが、たしかに秋の花はすっぱい感じです。そういうにおいもします。そして秋の花は、どの花もどの花も清くすんでいます。どんな小さな花でも、どんな色のない花でも、他の草のかげにこっそりとさいている花でも、よく見ると、みんなとくちょうを持っていっしょうけんめいに美しくさいているのです。

私はこの雑木林の草原へ、みなさんぐらいの子供を大勢連れてよく遊びに行きます。そして、

「みんな少しここで静かにしていてごらん。とてもよい音が聞えるのだよ」。

と言います。すると子供たちが、がやがやさわぎます。

「何があるんだい」。

というように、ふざけたような、とぼけたような顔をするのです。私はかまわないでしばらくだまっています。そうすると、そのうちにひとりの子供が、

「あ、水の音があちらに聞えます」。

と言います。なるほど利根川のせの音がその子の指さすあたりにそうそうとひびいています。

「あちらだけか」。

と言うと、他の子供が、

「こちらにも」。

と言って、他の方を指さします。なるほど左の方にも、そうそうとひびくせの音、私たちはその二つのせの音にじっと耳をかたむけます。するとまた、

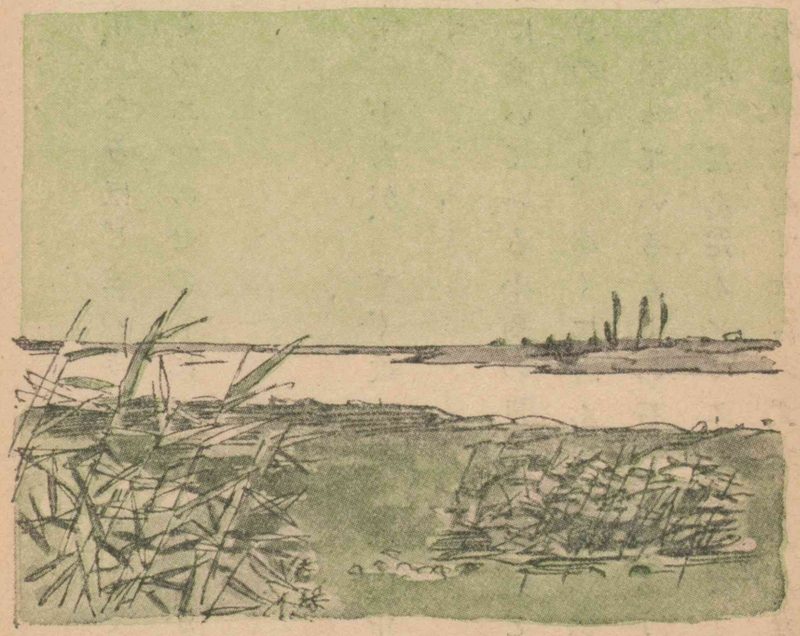
「ああ、鳥が鳴いている」。

と、低くささやく子供がいます。小鳥が、すぐ近くの、林の中を飛びながら鳴いているのです。

このようにして向こうの岸に鳴いている小鳥の声も、足もとの草むらに鳴いているこおろぎの声も、遠くに遊んでいる子供たちのさけび声も、川原で石を拾っているらしい石のふれあう音も、今まで聞えなかったものが、だんだんとすみとおってよく聞えてくるのです。みんなの心がすんできたのです。みんな

の心が静かに美しくなってきたのです。

みなさんは、こういう気持を味わったことがありますか。どうか林の中へ行ったら、心をすましてこういう音を聞いてください。私はこんな音が聞えるだけでも、秋が来ると楽しくて楽しくてなりません。



(二) 北国の秋

「暑さ寒さもひがんまで。」——暑いにつけ寒いにつけ、私たちの地方の人々は、毎年口ぐせのようにこう言っては自らなぐさめている。しかし、北国のこの地方では、八月のうらぼんが過ぎると、もうすっかり秋めいてくるのである。

いつしかに秋はきぬらしこのゆうべ
草むらごとに虫の声する

という良寛さまの歌がある。そのいつしかに秋の来たことを感じさせる虫の声も、うらぼんにはもう聞かれるのである。いなかのうらぼんはまことにしめやかである。家々には精霊棚をかざり、夜は至るところの墓地に小さなちょうちんがともる。あ

ちらの森かげこちらのおかの上というふうに散在した墓場墓場にさびしいろうそくの火がゆらめく。墓参りは夕方のすずしい風がふき始める時こくを待ってする。その時こくにはもうあちこちの草むらで虫が鳴き始めるのである。

だれであったか、「北国の夏の夜空のながめは、盛夏の秋にとなりしていることを感じさせる。」というようなことを書いていた人があった。いかにもそのとおりで、わけて私は毎年うらぼんの夜の墓参りの道すがら、ふしぎにそのことをしみじみと感じるのを常とする。

「もうじき秋が来る——」。

北国の晩夏の夜に感じる、この予感ほど私にとってなつかしい、さびしい、しめやかな、快い感じは、きわめてまれである。

いなかのうらぼんの夜ほど、しめやかな心持になる時は少ない。どの家にも、快い草のかおりのする新ごもをしいた精霊棚がかざられ、ほのかなろうそくの火がゆらめく。いつもより早く夕食をすませてから、人々はうち連れだって墓参りに出かける。墓は多くは、里からかけはなれたおかの上や、森の中や、寺のけいだいにある。うらぼんの墓参りには、きまって子供ら

に小さなちょうちんを持たせる。赤や青でいろどった小さな美しいちょうちんに火をともして持ち歩くことが、子供たちにとっては一年じゅうでの最もうれしいことの一つである。もうそろそろ、わせのほの見え出したいな田の上を、すずしい水のような夕風がそよそよとふきわたる。草むらでは虫が鳴き始める。そうした田の中の道に、子供たちの手に持たれた、美しい色のちょうちんの火が点々と続く。おかの上の森の中の墓地には、ふだん見ることのできない火があちこちにゆめのようにほのめく。

つけて食べるなすの味と歯ざわりとの日ごとに引きしまっていくのも初秋のうれしさの一つである。まったく秋風がふき始めると、ふしぎになすの味がうまくなるのである。たしか二宮

尊徳であったと思う。ある年かれはなすの初なりを食べてみたところ、ふしぎに秋なすのようなよい味がしたので、こんなふうに気候が不順ではことしはきっときょう年であると予言して、それがうまく的中したということを、何かの書物で読んだ。それは事実であったかどうか知らないが、とにかくなすの味が秋風のふくころから急に格別のうまさを持ってくることだけは事実である。

秋の気が動き始める八月末から九月初めは、いねを作ることを主としている農村の人々にとっては、一年じゅうの最もひまな期間の一つである。この農閑期に農村の人々は毎年うち連れだって山のおんせんへと出かける。しかし、いなかの人たちがおんせんへ行くのは、決して都会の人々のように単なる遊びや、

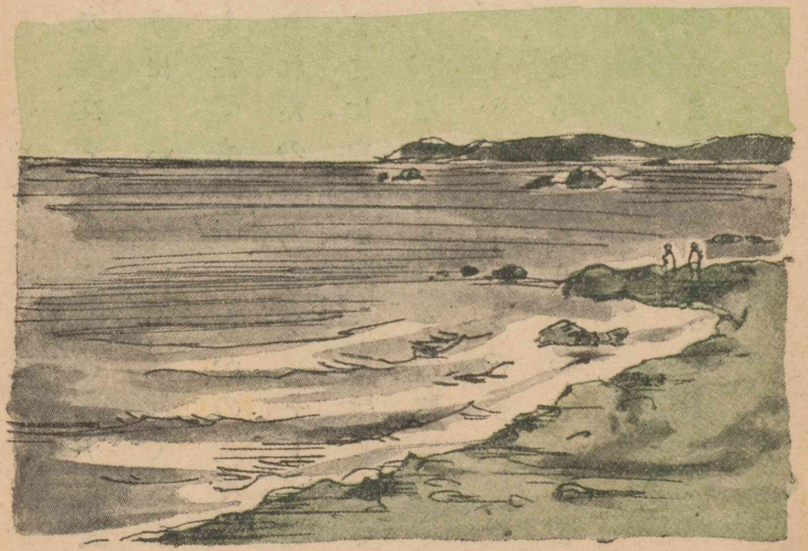
ひまつぶしや、ぜいたくや、みえからではない。ほんとうの意味での湯治であり、養生のためである。遠い道のりを、しかも自分の食りょうや、時にはすいじの道具までせおって行くかれらに、みえやぜいたく心のあろうはずがない。かれらは心からおんせんの効能を信じて、そのありがたい自然のめぐみに浴しに行くのである。おそらくおんせんの最初の発見者の多くは、かれらと同じような生活を営んでいたかれらの祖先であったろう。あるおんせんには、むかしきずついた白鳥のゆくえをたずねて行ったひとりのりょうしが、その白鳥が天然にわき出るあたたかいいずみできずをなおしているのを発見して、初めてそのおんせんの効能を世にしょうかいしたという伝説が残っている。またあるおんせんには、むかしあるひとりの正直な農夫が

どうかして自分の親の病気をなおしたいと神にいのった結果、ゆめによって初めてそのおんせんの所在を知り得たという伝説が伝えられている。こういったふうに、いま世に知られているおんせんの多くは、おそらくそうした名もないいなかの人々によって、ふしぎないんねんで発見されたのであろう。そして長い年月の間、ただ天然にわき出るままになんの設備もほどこされずに、しかも大勢の人々の、ふしぎなりょうようの聖地として、重んじられて来たのであろう。しかし、それらの多くは世の中の変化につれて、いま見るようなものとなり変わってしまった。

秋の気が動き始めるころから、海もまたいちじるしくそのおもむきを変えて来る。

夜の波の
地をうつ音の
まくらべに
ひびくにも知る
秋のきたるを

八月末になるとふしぎに波の音に秋らしい感じがそなわってくる。日本海がいかにも北海らしい特色をあらわして来るのもそのころからである。青い水の色が日に日に黒味を増していく。波のうねりがみょうにせせこましく、あらあらしくなり、いそに打ちつけるぐあいもなんとなくいっこくになる。漁師たちはそうした波の打ち方をよんで、



「ああもう秋波が立って来た——」。と言っている。それはさらに二百十日前後からは決まってしけ近くなっていくのである。

漁船のそうなんの最も多いのもそのころである。暴風雨にあって漁船の難破したひさんな光景やそれにまつわる悲しい話を、私たちは過去においてどれほど多く見たり聞いたりして来たかわからない。私たちの地方で最も多く初秋の暴風雨の難にあうのはいかつり船である。いかつり船の出るのはおもに六月から九月までの間で、しかもそれは夜間においてである。真夏の夜のないだ海に、点々たるいさり火が水平線をとりまいているのを、すずしい風のふく海岸でながめるのは美しい。能登(のと)の山に

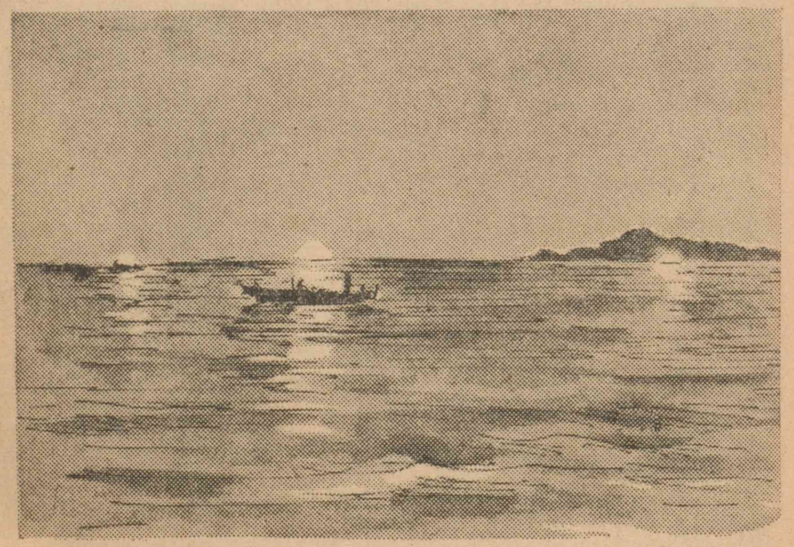
しずんだ夕日の余光に見わたすかぎり金色にかがやいている海面を、すずしい夕風をほに受けながら、すべるようにおきへおきへと出て行く、いかつり船の群をながめるのもたまらなく快い。けれども、いよいよ秋の波が立ち始めて、いつ思いがけない大あれが来るかわからないような夕ぐれに乗り出して行くいかつり船のなんとなくさびしそうなすがたや、その船の小さくなるまで波打ちぎわに立って見送っている漁師たちの妻や子供の不安そうなようすを見るのは、言いようもなくあわれなものである。

暗いさびしい
夜のおき
いかつり船の

火が見える。

どれがおうちの
船だろう
いくつもいくつも
火が見える。

うちのとうさん
真夏でも
おきは寒いと
言っていた。



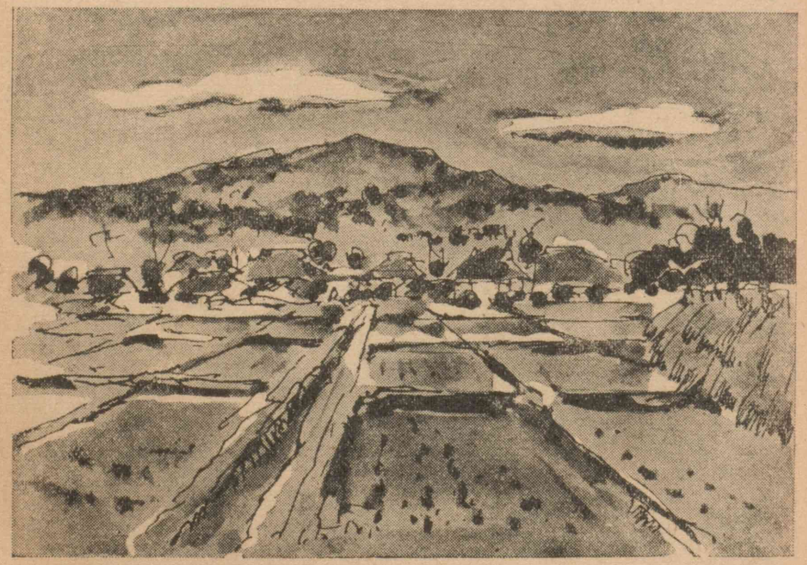
ときどき波に
かくれては
ちらちら船に
火が見える。

漁師の子供らのこうした心持を察してみたりして、私たちもときどき夜のおきに波のまにまに明めつするいさり火をながめて、みょうになみだぐましくなることがある。

夜じゅう、おきで働いたつかれにもまけずに元気よくろをおしながら、まだ日の出ないあけぼのの海をこぎ帰って来る漁師たちの心持は、その代わりどんなにすがすがしいことであろう。

秋風がふき始め、海があれ近くなるにつれて、漁村では日に日に漁師たちの気持がきんちょうの度を加えていく。それと同

じく農村では、うらぼんの休みや湯治場行きで養った元気をもって、人々は、一日も早く収かくのかまを持つ日の来るのを待つかがやかしい希望にむねをおどらせる。初秋の田園はこうして一日ごとにいきいきとした気持があざやかになっていく。しかし、北国の秋はあまりに短い。深い雪の底に一切をうずめてしまう長い長い冬が、すぐそこに来ているのである。



(三) 小柿

小柿は柿の種類ですが、大きさがおとなの小指の先ほどしかないのです。

私は子供のころこの柿が大すきでした。ほんとうに小さな柿ですから、子供のころでも一ぺんに二つも三つも、もぐもぐとほおばれました。

この柿は十月の末から十一月にかけて、しものふるころになると、黄色がかった小つぶな実が、黒ずんでくるのです。黒ずんでくると、しぶかった実がさとうのようにあまくなってくるのです。

私の生まれた家のうらには、かなり大きなこの柿の木があっ

たので、子供のころの私は、こっそり取っては食べたものでした。

おかあさんは、私がこっそりとまだしぶいうちから小柿を取って食べるので、心配して、

「しぶいのを食べるとおなかをこわします。もう少し待っていらっしゃい。」

と言われました。

しかし、こう言われたからとて子供の私には待ちきれるもの

ではありません。

ある時私は、いつものように小柿の木に登って思うぞんぶん食べ、ふところにも小柿のいっぱい付いているえだをおしこんで、さあ木からおりようとすると、どうしたはずみか、かなり太い木のまたに足をつっこんでしまいました。

私はあわてて足を引きぬこうとしました。けれども足は引きぬこうとすればするほど、ずるずるとからだの重みで深いところへはまりこみ、どうしてもぬくことができなくなりました。

そこで私は、

「足が柿の木にはさまったあ」

と、大声でおかあさんをよびました。そのうちに、手もだんだんつかれてきたので、ほんとうに進退きわまった形でした。

私はちょうどわなにかかったけもののようにさわぎたてました。

——すると、おかあさんは、おもやでぬい物をしていたらしいのですが、いきなりかけ出して来て私のすがたを見るなり、

「いくじがない」

と、わらいながらも、しっかりと下から私のからだをだきあげて、たちまち引きぬいて

くださいました。この時ばかりは私も、ひどいあぶない思いから救われた気持がして、ほっとむねをなでさすったのを覚えています。

これは、たしか私が小学校の一年生の時でした。おかあさんは、いつまでもこの時のことを覚えていて、

「おまえはあの時、わあわあとわめいていたよ。」

と、からかうのでした。

二　私たちの図書館

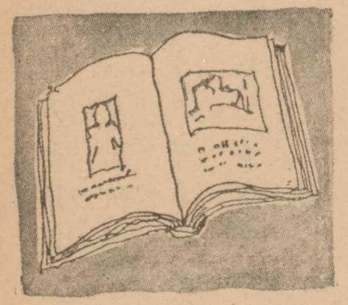
(一)　私たちの図書館

秋晴れの日が続くようになりました。

十月二十七日からの二週間は読書週間です。

ある日、国語の時間に、先生は本について、次のようにみんなに話してくださいました。

「みなさんが心に思っていることも、だまっていては、ほかの人たちにわかってもらえません。それでみなさんは口に出して話をしますね。しかしその話は、その時そこに



いた人だけにしかわかりません。はなれている人に聞いてもらいたい時は、みなさんは手紙を書くでしょう。また、こういうことをこんな順序でみんなに話したいのだがと思う時は、だれでも自分の考えを書きとめておきますね。

それと同じように、おとなの人たちが、いろいろと心に思う美しいことや、苦心して研究した結果なども、そのままにしておいたのではだれにもわかりません。それを書きとめて、正しいこと、美しいことを、世の中の人に広く知らせるのが本の役目なのです。本があればこそ、千年も二千年も前の人たちの思っていたことを、今の私たちが知ることもできますし、ひとりの人の考えを世界じゅうの人にわかってもらうこともできるのです。

本を読むと、楽しみながら、いろいろなことを覚えることができます。みなさんも、よい本をたくさん読んでください。そして、どんどんりこうになってください。

それから先生は、よい本のこと、図書館のことなどを説明してくださいました。

その日の帰り道、六年三組の田中君たち五六人は、話しながら歩いていました。本を読むのが大すきな池田君が、

「ぼく、この間おとうさんに、『アラビアンナイト』の『アラジンのランプ』という本を買ってもらったんだ。とてもおもしろかったよ。もっと『アラビアンナイト』を読みたいんだけれど、だれか持っている人はいないかしら。」

と言いました。田中君は家にたくさん本を持っていました。

「ぼくの家に『シンドバッドのぼうげん』ならあるから、あした持って来てあげよう」。

「ありがとう」。

すると小川君が、

「だれがどんな本を持っているかがわかったら、みんなが借りる時に都合がいいね」。

と言い出しました。

「そうだ。みんなで自分の持っている本の名前を書き出して持って来ようか」。

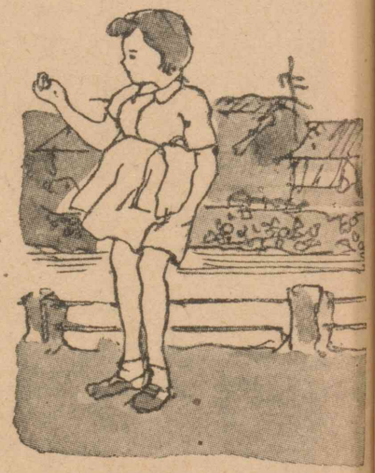
「それを集めて教室へ置いておこうか」。

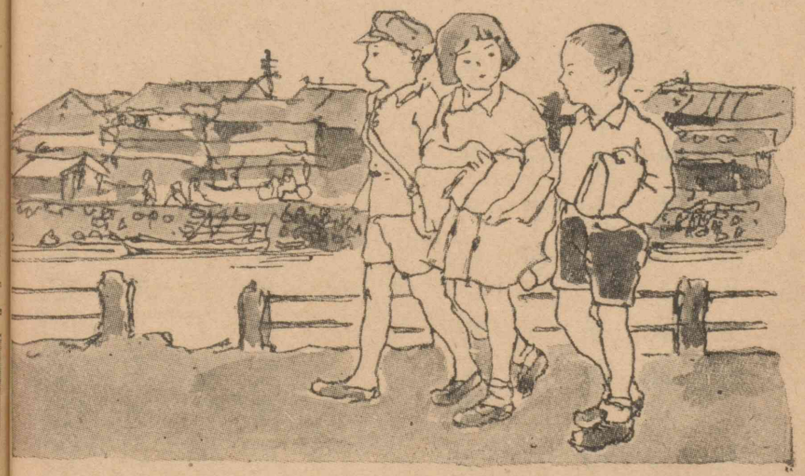
「それもいいけれど、読みたい本がいつも教室にあったら、どんなにいいだろうな」。

「本当だ。少しでもいいから、ぼくたちの本が教室にあったらいいね」。

「こんど自治会で相談してみようよ」。

そんな話がきっかけになって、次の学級自治会の時に、小川君が、





「ぼくたちの読みたい本を、教室に備えつけるようにしたらどうでしょうか」。

と、みんなに相談しました。みんなは大賛成でした。

「どういうふうにして集めるのですか」。

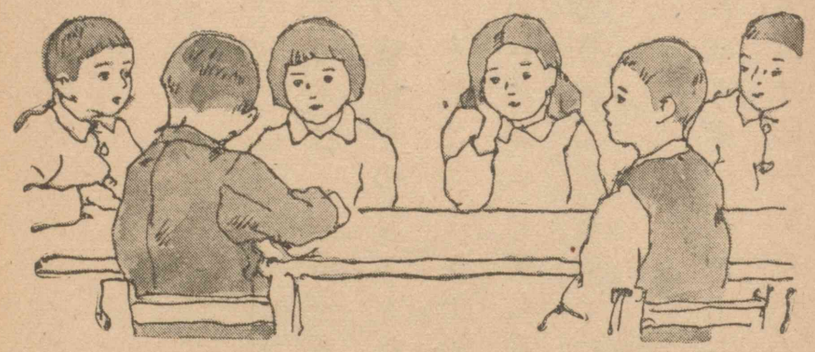
「みんなが、人に貸してもいいと思う本を持ち寄ったらいいと思います」。

「ひとり何さつですか」。

「ひとり何さつと決めるのではなく、貸してもいい本をたくさん持っている人はたくさん持って来ればいいし、ない人は持って来なくてもいいということにしたらどうでしょう」。

「賛成」。

「どんな本を持って来るのですか」。



「科学の本、お話の本、ざっし、なんでもいいと思います」。

「どうせ集めるのなら、ぼくたちの組だけでなく、六年全部でやってみたらどうでしょう」。

「六年というより、学校全体でしたら、たくさん集まるし、おもしろくていいと思います」。

「賛成」。

「では、このことを、ぼくたちの組の意見として、全校自治会で相談してみたらどうでしょうか」。

「賛成。賛成。」

学級自治会でこんなふうに決まったので、自治委員の山田君と岸野さんは、次の全校自治委員会の時にそのことを提案しました。そして三年以上の人たちが、めいめい本を持ち寄って学校に図書館を作ることになりました。

各級から選ばれたふたりずつの図書委員は、それぞれの組で本を集め始めましたが、集まりのよい組もあり、悪い組もあり

ました。だれが何という本を何さつ持って来たかを、いちいち帳面に書き付けることにしました。

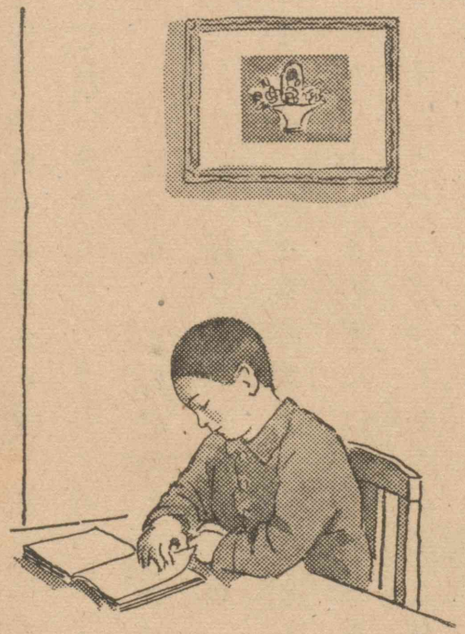
お話の本、まんがの本、ざっしなど、新しい本も古い本も、いろいろな本が集まって来ました。十一月の末には、本が三百十二さつ、ざっしが古いのと新しいのを合わせて百さつ余りも集まりました。

六年の委員たちは、集まった本を整理しました。お話の本、理科の本、社会科の本、ざっしと四種類に分け、お話を、外国のお話と日本のお話に分けまし

た。日本のお話には、むかしのものも今のものもありました。

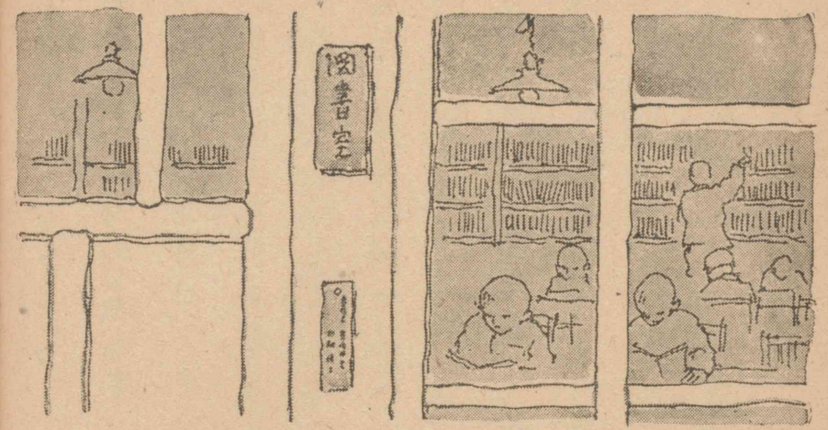
それから分類した本を、すっかり帳面に書いて順々に番号を付けていきました。それから、それと同じ番号を書いた小さな紙を本のせにはりました。それはなかなかたいへんな仕事でした。八人の委員たちが放課後残って、四日もかかりました。きちんと整理された本が、本だなにずらりとならんだ時の喜びは、自分たちの苦労をわすれるほどでした。

しかし、まだ仕事は残っていました。貸し



出し帳をこしらえて、本を借りた人の名、本の名、借りた月日、それから返した日を書き入れることにしました。また、ひとりが一度に借り出せるのは一さつで、期間は三日以内と決めました。図書委員たちは当番の日を決め、毎日放課後、こうたいで本の整理に三十分ずつ残ることにしました。

図書館ができて一か月ほどたった時、図書委員たちは、これから自分たちの図書館を、どうやってりっぱなものにしていこ



うかということについて、相談会を開きました。先生も来てくださいました。みんな、この図書館を作りあげた喜びと自信とをもって、思い思いの希望や意見を述べ合いました。みんなのおこづかいをけんやくして、一月に十円ずつ会費を出そうという意見や、自分たちでできる仕事を、みんなでいっしょにして、本を買うお金を作ってはどうかという意見などを出した人もありました。

図書館に投書ばこを備えつけて、本

の感想とか、希望図書の申しこみを集めようという意見も出ましたが、みんな大賛成でした。

それから、本を借りた人の中に、本を大切にしないでよごしたり、ページを折ったりする人があるので、みんなに注意することになりました。最後に、読んだ本の名前と、読んだあとの感想を、必ず書きとめておくと、それが自分の読書の歴史になって、おとなになってからも記念になるということを、先生が教えてくださいました。

(二) 書物の話

今私たちは、どんな山おくに住んでいても、またどんなさびしい海岸に住んでいても、たやすく本を買うことができる。

私たちが、社会のこみいった仕組や、進歩した機械のあつかい方を理解したり、またむかしの人が何を考え、何をしていたかを知ったりすることができるのも、この世の中に本があるおかげである。

本が私たちの生活にとって、どれほど大切なものであるかということは、本がなかった時代のことを考えればよくわかる。

そのころの人々は、見たり聞いたりしたいろいろなことをよく覚えていて、それを次から次へ話し伝えていった。その人た

ちが本の代わりをしたのである。それは生きた本ともいえよう。けれども生きた本は、今私たちが読んでいる本のように、正確ではなかった。話は口から口へと伝わっていくうちに、少しずつ変わっていって、あるものがつけ加えられたり、あるものがわすれられたりした。このために、勇ましい人がどんなけものもおそれずに、野山を走り回ったというような話は、いつの間にか、おおかみにまたがって森の中をかけめぐり、わしに乗って空を飛び回るふしぎな男の話に変わっていった。

生きた本の不便はそればかりではない。生きた本は、本とはいうものの、人間なのだ

から、病気になることもあれば、死ぬこともある。すきな時にすきな本を読むということはできない。病気がなおるまで待っていなければならなかったり、ほかの生きた本をさがさなければならなかったりする。これではたいへんこまるわけである。ことに今の世の中のように、すべての仕組がこみいっていて、それを理解するだけでもたくさんの本を読まなければならない時に、本が病気になって、その代わりの本をさがさなければならないというのでは、たいへんなことである。かりに代わりの本を見つけ出すことができたとしても、その本に、前の本と同じことが書いてあるとはかぎらない。一度に何さつも印刷される今の本とはちがって、生きた本は、人々によって覚えていることが少しずつちがっているからである。そこで、だれがいつ

読んでも、同じことが読みとれる本が、必要になってくる。

しかし、人間が、このような本を作るのは、たやすいことではなかった。だれでもいつでも読むことができて、しかも書いてあることがいつも同じであるためには、病気になったり、とちゅうで内容が変わったりすることのない本でなければならない。そこで聞いたこと、考えたことが、そのまま書き残してある本が必要になってくる。このような本を作る方法を人間が見つけるまでには、実に長い年月がかかったのである。

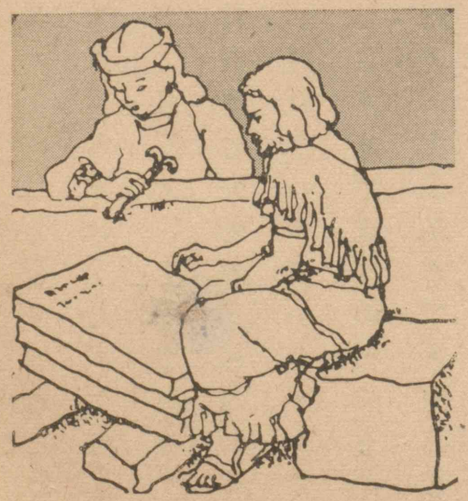
どんなことでも、文字で書き残しておけば、決してわすれることがなく、またいつでもだれにでも同じ意味を伝えることができる。文字は人間が発明したもののうち、最もすぐれたものの一つである。

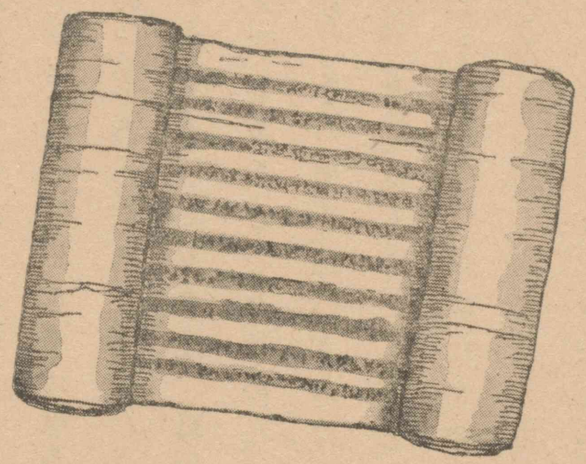
文字を書くことを知らなかった人々も大むかしから、絵をかくことは知っていた。それで、だんだん絵でいろいろなことを書きしるすようになった。漢字にしても月は☾、日は☉、山は⛰、川は〰というふうに、それぞれの実際の形を写したものから始まっているし、世界で最も古く開けたエジプトの文字も、同じように絵から始まっている。けれども、絵をいちいちかくことはめんどうなので、だんだん書きやすいように、今のような文字が作られていったのである。

こうして文字が作られ、正確な記録を残すことができるようになりはしたが、それを書きしるすのに都合のよい材料は、なかなか得られなかった。人々は何を使って何に書くか、それをめいめいにくふうしなければならなかった。そこで、その辺に

ある石とか、けものの骨とか、貝がらなどを手あたりしだいに使っていた。けれども石は重くて取りあつかいに不便であるし、骨や貝がらでは形が小さかったり、曲がったりして書くのにぐあいが悪かった。

そのうちに人々は、ねん土で大きな厚い板を作り、その上に文字を書くことを始めた。それから、その板を強いものにするために、火で焼くことも覚えた。このような本は、火事にあってもだいじょうぶだし、しめりけにもいたまないし、虫もつかない。またわれることはあっても、そのかけら





パピルス

は、集めてつなぎ合わせることができた。こういう大きなねん土板が、三万まいも一度にほり出されたことがある。どの本も、何十、何百まいの板からできていた。ちょうど現在の本が、たくさんのページからできているのと同じである。しかしねん土板は、一まい一まいが厚い上に重いので、たいへん不便であった。

そのころエジプトという国で

は、めずらしい材料を使っていた。それはナイルという川の岸にはえているパピルスという草の皮から作られたものである。パピルスの皮をはいで、うすくて広い小ぎれにわり、それらの小ぎれをつぎ合わせて一まいの紙にした。しかしこの紙は、はしからはしまで歩いたら、百歩もありそうな、長いリボンのようなものであった。そこでエジプト人たちは、このリボンをぼうにまきつけ、ぼうのはしを左手ににぎり、右手でリボンをひろげながら読んだのであった。

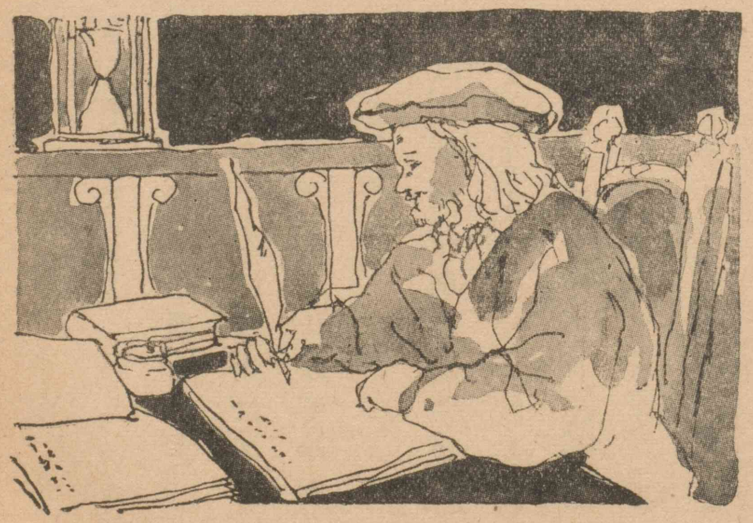
また、古代のローマ人は、ろうの本を持っていた。それは小さなもので、板のまんなかを四角にけずり、けずりとった所に黄色または黒にそめたろうがつめてあった。すみにはあながあいていて、そこにひもを通して、板を一さつの本のようにとじ

た。これはパピルスよりも便利なので、だいぶ長い間使われていた。

このころ、別の地方ではけものの皮からものを書く材料を作り出すことが行われていた。これは羊皮紙とよばれたが、すきな形に切ることができ、破れたり切れたりしないで、折りたたむことができるので、パピルスよりもすぐれていた。またパピルスのように表だけでなく、うら側にも字を書くことができた。一ページずつとじた現在のような形の本は、羊皮紙を使って初めてできたのである。

パピルスや羊皮紙が使われていた時に、中国ではすでに、今の紙の祖先のような紙が作られていた。この紙がアジアからヨーロッパに伝えられると、便利なので急速にひろまっていった。

けれどもこのために本の入手がたやすくなったわけではない。そのころはまだ印刷術が発明されていなかったので、人がいちいち手で書いていくよりほかはなかった。人が書くとすれば、きれいに写し終るには、細かい文字の本なら、一日に二十ページか三十ページがやっとであるから、一さつ作るのにも、長い時間がかかり、ねだんも高いものになった。そのために、本を手に入れて勉強できるのは、ごく一部の人に限られ、多



くの人は気の毒なくらい無知であった。

しかし、やがてこの筆写の不便をなくそうとして、いろいろのくふうが行われるようになり、ついに印刷術が発明された。印刷されたもののうち、今残っている最古のものは日本にある。千二百年近く前に印刷されたものであるが、どんな仕方で印刷されたかということは、まだよくわかっていない。

むかしふつうに行われた印刷の方法は、木版印刷と活字印刷である。木版というのは、文章や絵をそのまま木にほったものである。この方法は中国では千百年ぐらい前から始められ、九百年前ごろからは、たいていの本が木版印刷になっている。西洋ではそれよりもおくれて、五百七十年前ごろに発明されたようである。これまでの、一字一字写していく方法と比べれば、

一まいの版木で何まいも刷るのだから、はるかに便利であった。

活字印刷は、中国では木版印刷がさかんになった九百年前ごろには発明されていたものらしく、初めはにかわを固めて作ったが、後には木活字、銅活字も用いられるようになった。これは、一つ一つの文字を一定の形をした木や銅にほって、文章のとおりに組み合わせていくのであるが、一つの活字がすりへる

まで、何回も使える便利がある。西洋で活字を発明したのは、ドイツのヨハン・グーテンベルクという人だといわれている。今から五百年ほど前のことである。グーテンベルクがある日、子供を連れて森へ散歩に出かけた時、木をけずって文字をきざみ、おもちゃとしてあたえたが、それから思い付いて活字を発明したといわれている。

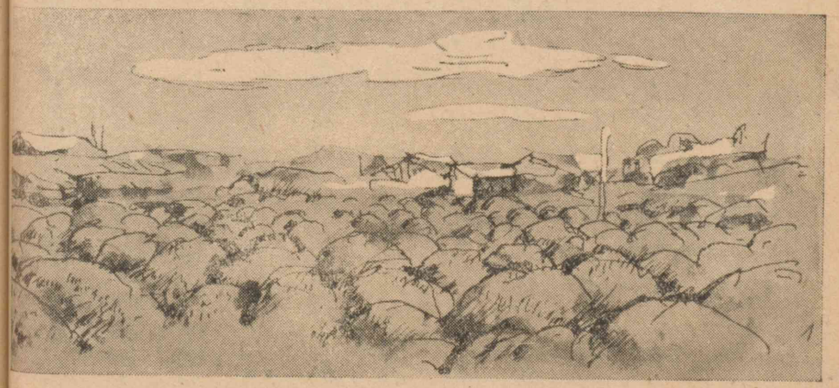
こうして活字を使って印刷するようになってから、本が大量に作られ、人々の手にわたりやすくなった。このことは、それからの世の中の進歩に、非常に大きなえいきょうをあたえずにはいなかった。だれかのすぐれた考えは、ただひとりの持ち物で終らず、すぐに大勢の人の持ち物となることができるようになった。一つの発明も、すぐに大勢の人に利用されることがで

きるようになった。しかもこの本は、生きた本とはちがって、初めの人の考えたとおりに、とちゅうで言い誤られたり、わすれられたりすることがなく、正確に伝わっていった。世の中の進歩が、これによってどれだけ早くなったか、はかり知れない。また、本が一さつずつ作られて、ごく限られた人々の間にしか行きわたらなかった間は、世の中に進歩があるとしても、それはこの限られた人々の間の進歩にしかすぎなかった。しかし私たちに大切なのは、世の中全体の進歩であり、私たち全体が楽しむことのできる進歩である。私たちの印刷された本は、この進歩を大勢の人に伝えるために、大きな役わりを果たしているのである。

三　作られるまで

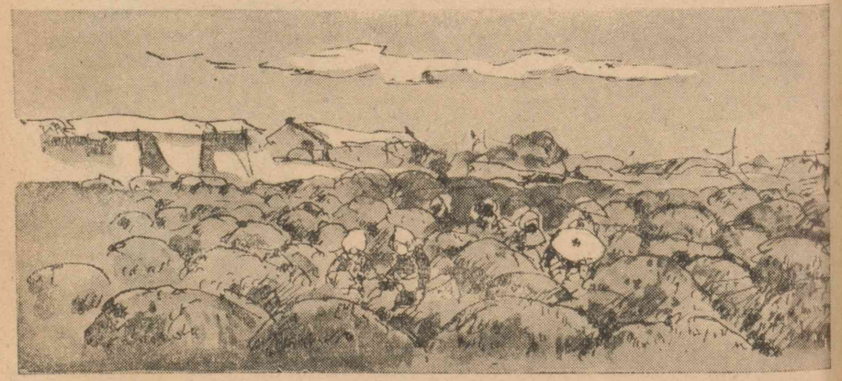
(一)　茶

なだらかなおかの茶畑から、のどかな茶つみ歌が聞えてくる。赤いたすきに赤い前かけ、ま新しい手ぬぐいをかぶったむすめさんたちが、茶つみかごを首にかけて、茶の芽をつみながら、歌っているのだ。むかしながらののどかな茶つみ歌も、まだ少しは残っているが、それでは、茶をつむ仕事がはかどらないというので、



近ごろは調子の早い、はやり歌が歌われるようになった。茶をつむのも、今までは、いちいち手でつんでいたが、そうしていてはのろいから、チョキチョキはさみでつむようになった所もある。のどかそのものと思われていた茶つみも、こうして時代の進むにつれて、何よりも能率が大切に思われるようになり、仕事を早くするためのくふうがこらされるようになった。

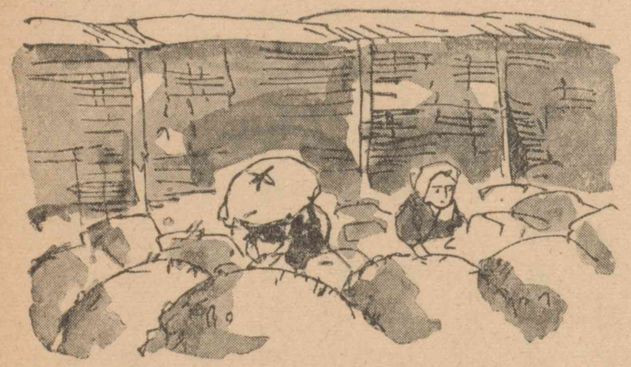
茶で有名な宇治あたりでは、茶つみ女は、その土地の人もかなりいるが、たい



ていは近くの国々から、農閑期を利用して、やって来るのが多い。こうした女たちには、その年の茶の芽をつまないと、年が送れないというような、茶つみのすきな人が多い。立春から数えて八十八日目の、いわゆる八十八夜ごろになると、こうした女たちが、着がえを入れた大きなふろしき包みをせおって、宇治の里へはいって来る。

女たちはたいてい一日に六七キロの茶をつむが、じょうずな者になると、二十キロ近くもつむそうだ。ぎょくろなどの上等の茶になると、新芽の中の三つ葉だけをつむのであるから、なかなか手間がかかる。

ぎょくろといっても、別に茶の木が変わっているのではない。ただ、芽が出る時の手当てがちがうだけなのである。ぎょくろの茶畑は、新芽の出る少し前から、しもよけ、日よけのおおいがよしずとわらで作られる。こうしてしもにあたらず、直しゃ日光をのがれた新芽は、やわらかい青々とした色になり、なんともいえぬぎょくろ特有のあまい味を持つようになるのである。しかし茶の木の樹齢によって茶の品種はすっかりちがってくる。宇治のぎょくろなどは、樹齢百年前後のものが多く、二百年ほどたったものもある。これくらいの老樹に

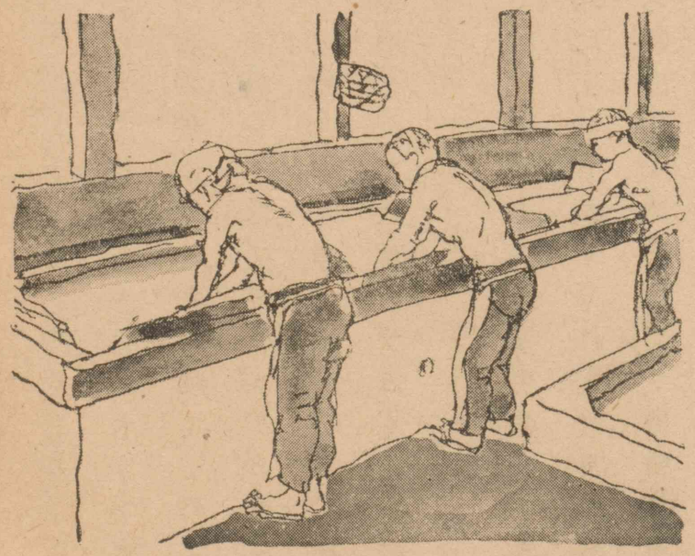


なると、その茶の味も舌にやわらかで、実にさわやかな、なんともいえないかおりを持っているといわれる。

こうしてつまれた青茶は、ほいろ師の手にわたされる。ほいろ師は、直接茶に火があたらないよう、また茶が火のにおいのしないように、炭火を入れたほいろの上にこもわらをかけ、鉄ぼうやあじろをのせ、その上にさらに、木わくの中に厚い紙を張った助炭というものをのせて、その中で、手で茶をもむのである。ふつうの茶は、およそ三時間ぐらいもめばよいのであるが、ぎょくろは一日じゅう休む間なしにもまなければならない。茶独特の高いかおりを残すのも、あざやかな色を出すのも、この間の手もみの仕方一つによるわけである。この「三時間のこつ」によって、茶が生きたり、無茶苦茶になったりする。だから、

ほいろ師の苦労もひととおりではない。たとえば、うす茶のほいろ場などは、赤道直下そのままの暑さで、はだかでいても、からだじゅうからじりじりとあせがしたたるほどである。しかもこの地ごくのような暑さの中で一秒二秒を争うようにして、急いでもまなければならないのである。

もみあがった茶は、むしろの上にまんべんなくひろげてかわかす。こうしてかわかしたのがあら茶で、古葉や黄葉やくきな



どが交っているから、それらをいちいちより出すのである。こうして初めてひととおりのお茶になる。これをさらに木うすに入れて、適当の長さに切断し、用意の紙ぶくろに入れて、町に売り出すのである。こんなにまで手数をかけてできあがった茶は、ほんのわずかで、ぎょくろなどは、四キロの生葉が、もまれて一キロにちぢまり、さらに精選されて六百グラムぐらいになってしまうのである。

このようなほいろ師の手もみでは、のろくて大量生産ができないからというので、近年手もみに変わらぬすぐれた製茶機械が利用されるようになり、ほいろ師は年々追われて、機械工業が手工業にとって代わるようになった。しかし、ぎょくろのような高級なものになると、機械ではどうしてもよい味とかおり

のものができないので、今でもやはり、むかしながらのほいろ師の手もみでやっている所もある。

だいたい、茶には緑茶とウーロン茶と紅茶の三種類があり、緑茶の中にも、せん茶、ぎょくろ、うす茶、ぎょく緑茶、番茶などがある。時代の現われというのであろうか、近年はぎょくろの需要が少なくなり、うす茶の需要が多くなってきた。もともとぎょくろは、北海道や北陸などの寒い土地と、東京都でおもに消費されていたものであるが、めまぐるしく動く時代の速度は、さすがにおちついて、ごく少量のぎょくろを味わう、のんびりした気分を許さなくなったのであろう。

しかし、コーヒーや紅茶のあっぱくはほとんど受けることなく、むしろうす茶から作られた新種類のものは、夏季の清りょ

う飲料用として、紅茶などよりも喜ばれ、そのさわやかな色とかおりによって、海外まで進出している。茶にふくまれるテーン(カヘイン)、ビタミンA、Cが、薬学的にきめがあるということが発見されてから、うす茶はますますふえてきて、うす茶応用のアイスクリームやチューインガム、チョコレートなどまで作られるようになっている。

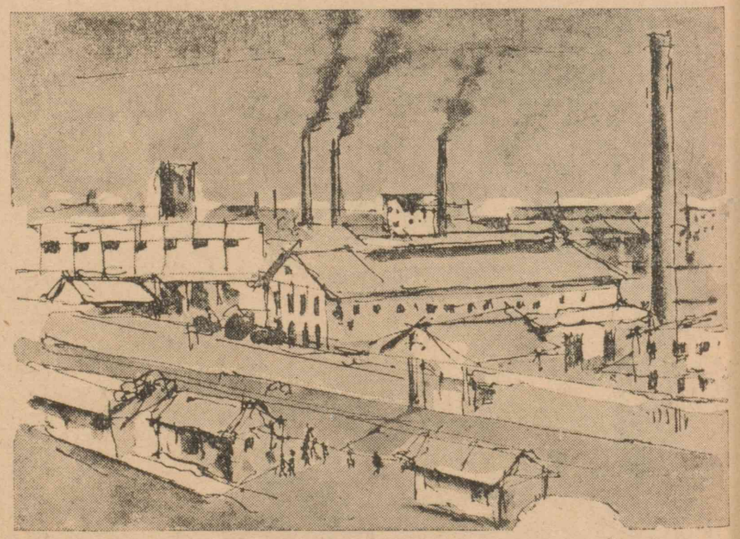
茶といえば、むかしから宇治が本場のようにいわれているが、静岡(しずおか)県でも大量に作っている。

茶は、日本の貿易の輸出面を代表する重要な選手のひとりである。

(二) 紙

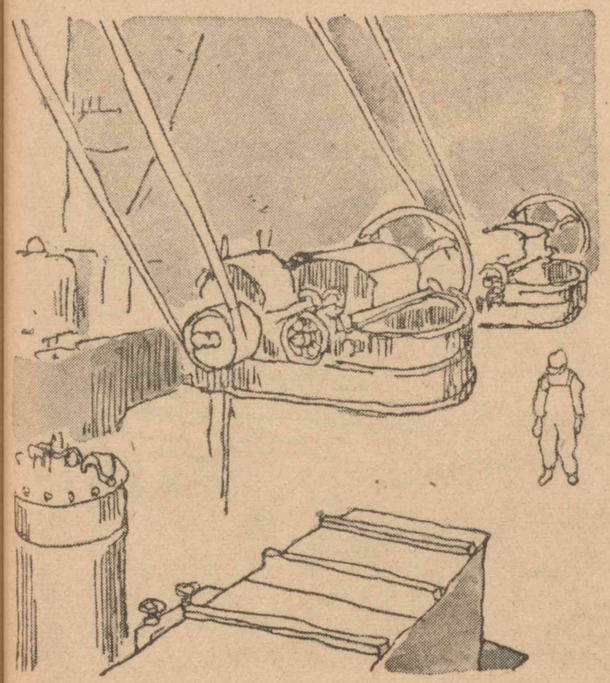
ぼくたちは、本の用紙がどうして作られるかを見学するために、ある日、先生にお願いして、製紙工場に連れて行ってもらった。

電車をおりると、すぐ、大きなえんとつが見えて、その下に工場の建物がならんでいた。朝の工場地帯はひっそりしている。駅から五分ほど歩いて製紙工場に着いた。



あまり大勢ではよく見えないので、ぼくたちはいくつかの組に分かれて、それぞれ案内の人に説明していただくことにした。

工場にはいると、わかい男の人がふたりで、高く積み上げた白いボール紙のような物を、一まい一まい、ためぜんぜんのようなおけの中に、ぽんぽん投げこんでいるのが、まず目についた。そのおけはたて六メートル、横四メートルぐらいのだ円形で、コンクリートでできている。おけの



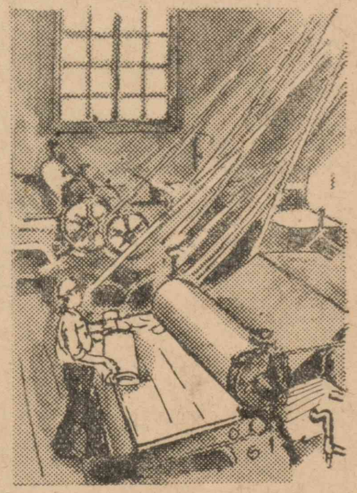
水は機械でかき回され、絶えず波立っている。

工場の中は、いろいろな機械がごうごうと絶え間なく動いていて、案内のおじさんの話がはっきり聞えないくらいだ。ぼくたちは、おじさんの説明を一こと聞きもらすまいと耳をすました。

「今、そのおけに投げこんでいるのはパルプという物です。これは木材から作った物で、これを作るには、二とおりの方法があります。」

こう言って、おじさんはその二つの方法をくわしく説明してくれた。

その一つの方法は、木を細かくきざみ、それに薬を入れてどろどろになるまでにて、その中のすじだけを細かいあみ目でこ



し、それを固めて作るのだそうである。もう一つの方法は、細かくした木をにる代わりに機械ですりつぶし、どろどろにして、それを固めて作るのだそうだ。品質は初めの方法で作ったものの方が、はるかによいそうだ。

「それでは、今投げこんでいるのは、どちらのパルプですか。」

森田君が大きな声で聞いた。

「今入れているパルプはあとのやり方で作ったものです。しかしたいていの紙は両方のパルプを混ぜて作っています。新聞紙のような品質の悪いものでも、二十パーセントぐらいは前のやり方で作ったパルプを入れています。」

おじさんはていねいに説明してくれる。

「それから、ここに動いている機械は、ピーターといって、パルプを紙にすきやすいようにどろどろにするものです。パルプはこのおけの中に投げ入れられて、水のためにやわらかになり、この機械でぐるぐるかき回されているうちに、どろどろになるのです。」

なるほど、投げこまれたパルプは、おけの中でぐるぐる動いている。

一まいずつでなく、三まいか四まい、いっしょに投げこんだのではだめなのですか。」

山田君が質問をした。

「そうすると、パルプが機械につかえたり、また機械をこわしたりすることがあって、だめなのですよ。それから、紙を白くするために、このおけの中にさらし粉を入れたり、青味を付けるために、青いえのぐを入れたりすることもあります。」

ぼくたちは、パルプがとかされていくのを順序どおり見て行った。

「ここの機械は何で動かしているのですか。電気ですか。」

と、だれかが聞いた。

「いいえ、石炭をたいて動かしているのです。」

おじさんが答えた。

へやも広くて、大きな機械がたくさんならんでいるのに、そのわりに、工員さんたちは少ししかいないようだ。

「どうしてこんなに人が少ないのですか。」

と、ぼくはふしぎに思って聞いてみた。

「ええ、紙を作るのは、大部分機械がやってくれるので、人は少なくてよいのです。さあ、これから、本当に紙のできる所が見られますよ。」

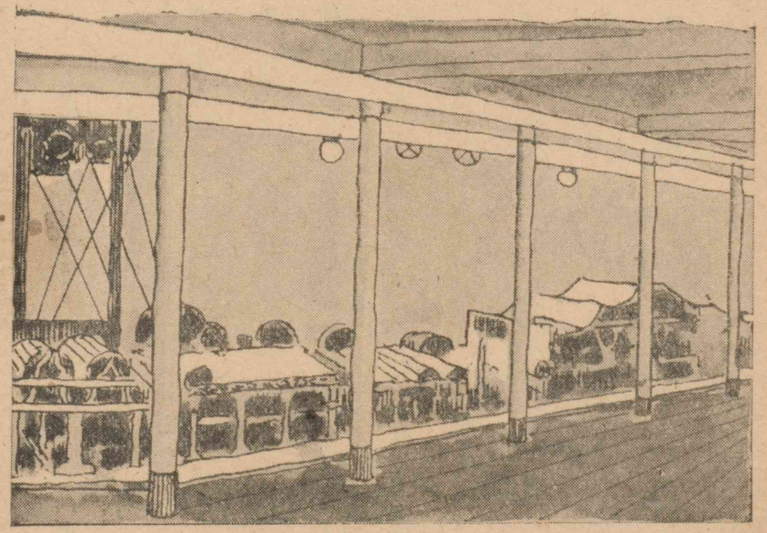
ぼくたちはおじさんのあとについて、次のへやにはいった。

そこは、前のへやよりもかなり低くなっている。へやの入口に近い所には、向こうのへやから、水にとかされたパルプが、おとなのせいよりも高い所にある、はば三メートルぐらいのとい

を伝わって、どんどん流れて来ている。といは六だんぐらいになっていて、だんだん低くなっている。

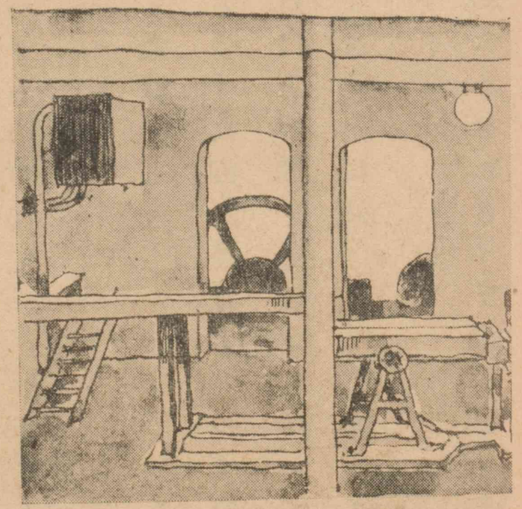
「ここまで来る間に、パルプはだいたい百倍ぐらいのうすさにとかされているのですよ。」

とけたパルプは、といを流れ下って、最後に、長さが十メートルぐらいの平らな板の上に出るが、さざなみ一つ立てないで、すべるように流れている。



「よく見てごらんなさい。この機械は、ちょっと見ると、平らな板のように見えますが、実は長い金あみが回っているのですよ。早く回っているので、金あみの目は見えないけれども、この上を通るうちに、パルプをとかした液の水分が、あみの目を通って、上にこぼれるのです。ここをわたりきるころには、水分は、初めの七八十パーセントぐらいに減ってしまいます。」

説明を聞きながら、みんなは金あみの上の流れを見守った。

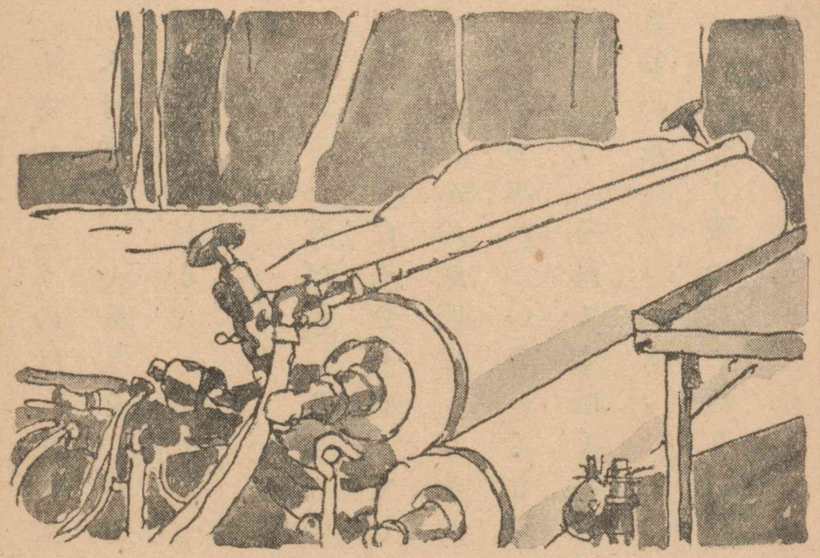


金あみの一方はまだ水なのに、一方のはしは、もう紙のように見える。どこまでが水で、どこからが紙なのか、見ていてもわからない。いつの間にか紙になっているのだ。

水から紙への移り変わり――、その絶え間ない流れの美しさに、ぼくたちは、機械のさわがしい音もわすれて、いつまでも見とれていた。

この機械に続いて、つつのような機械がぐるぐる回ってかみ合っている。その間を、紙が流れるように回って行く。つつの表面には、毛布が張ってあって、紙はその間を通るうちに、水分をすい取られて、六十パーセントぐらいに減ってしまうそうである。

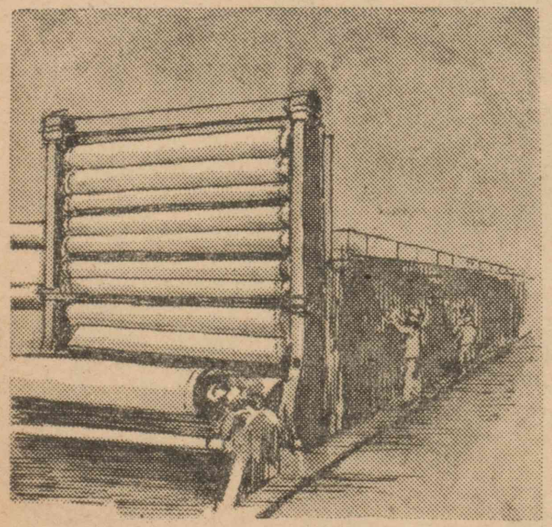
紙はさらに、もっと大きなつつがかみ合わさって回る中を通



って行く。この円とうが二三十もならんで、いっせいに回っているありさまは、実に力強い感じだ。これは、かんそう機というのだそうだ。紙はその間を通って、シュッ、シュッとゆげを立てている。つつの中をじょう気が通って熱くなっているので、そこを紙が通って行くうちに、水分がすい取られ、この機械を出るころには、ほとんど水分がなくなってしまうのだ。

「やあ、向こうのは、ずいぶんゆっくり回っているな」。
木村君が、大発見をしたような声を出した。ぼくたちが今見ている物のほかに、もうひとそろいの同じような機械が動いているのだ。
「ああ、あれはね、こちらのより紙が厚いので、ゆっくり回して、十分に水分を取ってしまうというわけなのですよ」。
おじさんの説明に、なるほどと、ぼくたちはうなずいた。
次から次へ、いろいろな機械に出会うので、頭がぼうっとしてしまう。それでもぼくたちは、いっしょうけんめい説明を書きとめた。
かんそう機の次にあるのが、光たく機だ。上下に重なったロールの間を紙が通るうちにつやが出て、また紙の強さが増すの

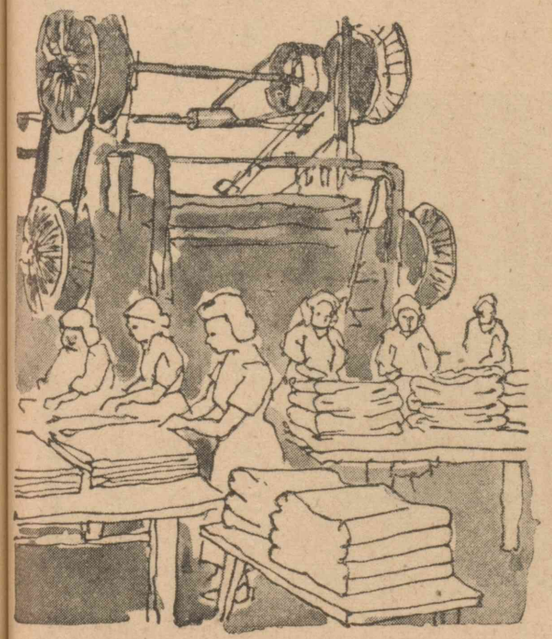
だそうだ。それから、次のまき取り機でぐるぐるまかれて、大きな紙のつつができている。パルプが水にとかされて流れとなり、それがやがて紙の流れとなり、いつの間にか、紙のつつになってしまった。新聞紙を作る機械には、一分間に千二百メートルもできるものもあるそうだ。人間の力もたいしたものだと感心した。
次のへやは仕上げ室だ。
もっとつやを付けるための強光たく機という機械が動いている。また、一度まき取った紙を、もう一度き



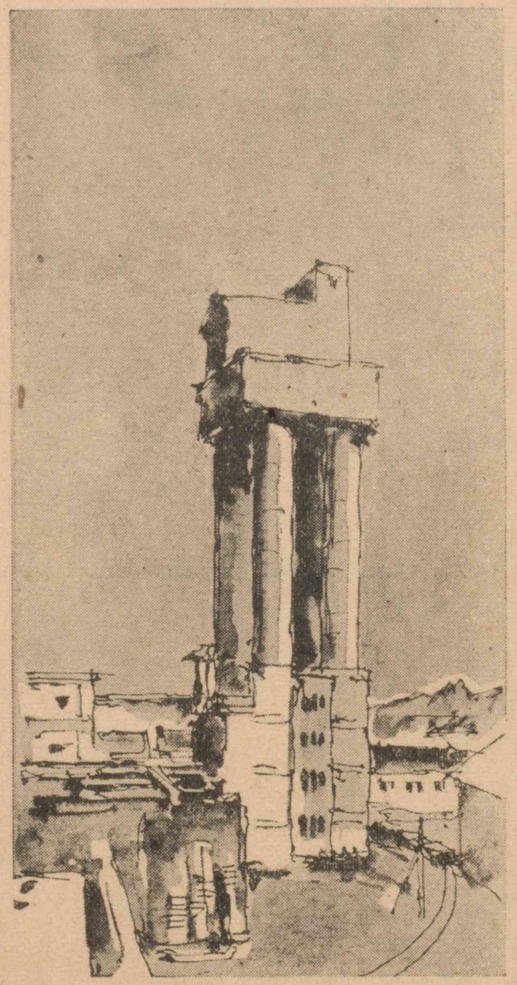
れいにまきなおす仕上げのまき取り機も動いている。別の方には、まき取った円とうの紙を断ち切る断さい機というのがあった。

「教科書やざっしなどを印刷するには、このまま切らないで、輪転機にかけて印刷します。しかしふつうの印刷には、ほら、あのように一まい一まい四角に切ってたばねたのを使います」。

おじさんの指さす方を見ると、女工さんが何人も、いっしょうけんめいに切った紙を数えてたばねていた。



これで、パルプから紙になるまでの見学は終った。おじさんにお礼を言って工場を出た。



四　美しさを求めて

(一)　玉虫のずしの物語

むかし、そのころの都、あすかのほとりに、わかい仏師がいました。法隆寺金堂に納められている、金銅の薬師如来を造ったという名高い仏師、鞍作止利のでしであったともいわれ、また聖徳太子のすがたをえがいたという、これも名高い阿沙太子のでしであったともいわれていますが、その名はわかっていません。

仏教がインドから中国に伝わり、さらにちょうせんをへて日本に伝えられたという年からすでに五十年ばかりたったころで

すから、仏師の数もかなり多くなっていました。

その上しらぎ、くだら、こまを初め、遠くはインド、サラセンの国々からも、寺工、瓦博士、絵師、仏師などが、たくさんこの都に集まって来ていました。ですからよほどの仏師でないかぎり、名を知られるところまではいきません。まして、わかい仏師などの名が、知られるはずもありません。といって名がなくては話がしにくくなりますから、若麻呂とでも、かりに名を付けておきましょう。

さて、仏師といえば、仏像を造る者のことですが、仏師といわれるほどの者は、絵もかけば、えのぐも造る、また製紙、墨術のようなことから、大工仕事のようなことまで、なんでもひととおりはこころえていなければなりませんでした。今でも、

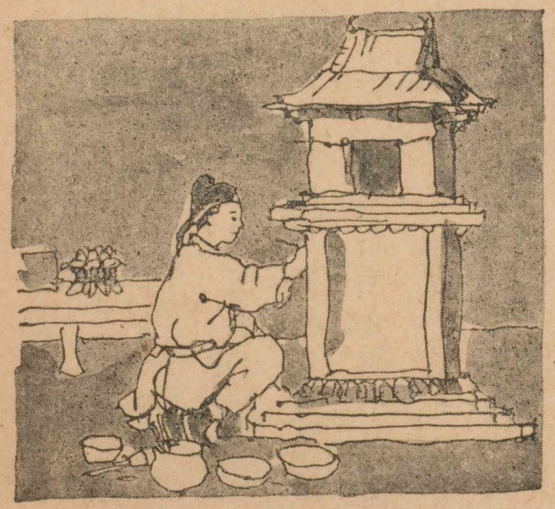
一芸にひいでようとする者は、何事によらずひととおりはこころえていなければなりませんが、とくに、そのころはそれがふつうだったのです。

とにかく、仏師にかぎらず、絵師にかぎらず、そのころそうした仕事をしていた者は、美しいものを造ること、今のことばでいえば、美術のすべてを造りあげる者のことでした。仏師が仏像を造るのは、仏像を造るというだけのことではなくて、この世にまたとない、美しいものを造り出そうとするためでした。したがって、ほとけのおしえ（仏教）を信じてはいなくても、ただ美しいものを造ろうとするために、仏師となる者もありました。

ところで美しいものとは、どんなもののことをいうのでしょ

うか。空の色、雲のすがた、のぼる朝日、しずむ夕日、たなびくかすみ、野にさく花、きらめくわか葉、さえずる小鳥、かがやく星、まどにさす月、みな美しいものばかりで、数えれば、かぎりがありません。若麻呂はただもう、美しいものが造りたい、目もくらみ、心もとけるほどのものが造りたいと、そのことばかりを考えていました。

若麻呂は一心に仕事をしました。力をこめて打ちおろす若麻呂のつちのひびきは、朝早くから聞えてきました。そうかと思うと何をしているのでしょうか。いく日も、



いく日も、ひっそりとつちの音が絶え、あかあかとしたあかりが、夜おそくまで若麻呂の家のまどにかがやいていることもありました。

また、都から遠くはなれたなにわの里で、四天王寺のとうの前に立っている若麻呂を見たと言う者もあれば、あせみどろになってふいごをおし、こまの国からわたって来た冶金術士の所で、とけて流れる金の火を、見つめていたと言う者もありました。

手足がかぶれるのもかまわずにうるしをねり、ひげの長いくだらの画師といっしょに、あやしげなけものののすがたをかいているのを見たと言う者もありました。

何を造っているのか、若麻呂はだれにも話しませんでしたが、

そのうちに、若麻呂はすばらしいずしを造っているのだということが、知られてきました。

人々は話し合いました。

「おい、聞いたか。若麻呂はすばらしいずしを造っているそうだ。」

「ほほう、ずしといえば仏像を納めるものだが、そんなものが若麻呂にできるのかね。」

「いや、もうできているそうだ。高さが六尺もあって、屋根は金銅のかわらぶき、まっ黒なうるしぬりで、その上に、みごとな絵がかいてある。中の正面には千仏像が、前のとびらには二天の像が、右と左のとびらには二菩薩の像が、まるで生きているようにえがいてあるということだ。」

「ふうん、たいしたものだ。」

「たいしたものだ。」

と、うわさはだんだんひろがりました。

推古天皇の三十二年には、仏教のしんこうがだんだん高まり、全国の寺の数は四十六というほどになっています。名も知れぬわかい仏師の仕事ではあっても、どこかで、だれかが、すばらしいずしを造っているといううわさは、それからそれへとひろがりました。できぬ前からこんなうわさを立てられては、どうしてもりっぱな仕事をしなければなりません。

うわさのとおり、若麻呂はずしを造っていましたが、心をこめて造りあげただけあって、実にみごとなできばえでした。

うわさなどより、ずっとりっぱでした。美しいものを求めて

やまぬ仏師としてのたましいが、火よりも強くもえあがったためでしょう。そのずしはもうほとんどできあがろうとしていました。

ずしの四方にえがかれてある絵も、ひとつの絵ではありません。仏画のうちでも、ふつうのうでではとてもえがけぬとされている四つの場面の絵

が、赤、青、白、黄、黒の五色のうるしで、あざやかにえがかれているのです。

美しい上にも美しく、かぎりなく美しいものを造りあげようとすることだけが、若麻呂の願いのすべてとなりました。

人の力のかぎりをつくす若麻呂の仕事ぶりは、すさまじいものでした。しかし、美しいものを求めようとすればするほど、美しいものは手のとどかぬ所へ遠のいて、星のようにかがやくばかりです。

若麻呂はつかれました。しかしつかれはてても、美しいものを求める心はやみません。こうして春もすぎ、夏もすぎ、秋もすぎ、冬もすぎ、また春がめぐってきても、若麻呂のしなければならぬ仕事は終りません。

さて夏が来ました。どこもかしこも緑につつまれた、あすかの里の、いきいきとかがやく夏になりました。

しかし、若麻呂のずしはまだできません。いや、実は、もうすっかりできあがって、あとは仕上げをすればよいだけでした。ところが、その仕上げをするばかりになってから、若麻呂には、どうしてよいのか、わからなくなりました。

自分の力を出しつくして、もう、どこにも、手をつけることができません。いくら考えても考えても、仕上げのくふうがつきません。

いまは身も心もつかれはて、若麻呂は、ある日、すずしいかげを作っている道ばたの、けやきの木の根にこしをおろして、ぼんやりとしていました。

ふかぶかとしげったけやきの葉を鳴らして、風が通りすぎていくほかには、だれひとり通る者もありませんでした。ただ、せみの声がえだというえだの間からほとばしり、夕だちのように若麻呂の上にふりそそいでいました。

夏の真昼の静けさを音楽にしたようなせみの声――群がり集まっている時のせみの声というものは何かしんと静まるような、ふしぎなひびきとなるものです。若麻呂

は、ねむるともなく、さめるともなく、うつうつとしていました。

と、足音をしのばせて、後から近づく者がありました。何者でしょうか。大陸の文化がようやくわが国に伝わり、世の中がおいおい開けかかって来ていましたが、大部分の民百しょうは苦しみぬいていましたから、世をのろい人をうらむぬすびと、おいはぎなどは、都のほとりにもみちみちていました。近づいて来た者は、そういう者かもしれません。

はっとして、若麻呂はふり向きました。すると、なんとそれは、かみの毛をすずめのすのようにふりみだして、手に長いせみとりの竹を持っている、はだかの男の子でした。

若麻呂のいることに気がつかず、せみをとろうと近づいて来

たのです。ところが、ひょっこり若麻呂が顔を出したので、若麻呂より男の子がおどろきました。かえるのようにとびのきました。

「ひゃあっ、おどろいた」。

こう言うと、男の子はねこよりするどく、じっと若麻呂を見つめました。が、すぐ若麻

呂だと気がついて、ほっとしたようにほおえみました。

「なんだ、おじさんか。ぼ、ぼくは、けやきの根っこぼうずかと思ったんです」。

「あははは……」。と、若麻呂はわらいました。

なんと、まあ、子供というものは、まるはだかであろうと、かみの毛をふりみだしていようとかわいいものでしょう。長い間わらうことをわすれていた若麻呂も、わらわないではいられません。

「来い来い、ここへ来い」。と、若麻呂は言いました。

「わたしがせみをとってあげよう」。

若麻呂は男の子から竹を受け取ると、先を輪にして、付けてあるくものすを指でさわって、ねばりけをたしかめました。

そしてこっそりと竹をのばすと、よいか、とるぞというように、男の子の方をふり向きました。とたんに、どうしたのでしょう。若麻呂は、そのままじっと目をすえて、男の子が手ににぎっているものを、見つめてしまったのです。

「それを見せなさい」。

と、若麻呂は言いました。

「これですか」。

「それだ、それだ」。

「これは虫です、さっきつかまえた玉虫です」。

「うーん」。

と、若麻呂はうなりました。玉虫を受け取ると、目をこらして見つめました。

ああ、なんという美しい玉虫のすがたでしょう。からだも足も、金のように緑にかがやいています。ひげは黒かとも見えるこいあい色です。せなかをつらぬいてむらさきの二本のすじが走っています。そのむらさきのつやつやしさ。見れば見るほど、これが虫かとおどろくばかりです。にじがくだけて、そのひとかけらがこぼれおち、命を受けて虫となったとでもいいましょ

うか、見ほれるばかりでした。

たちまちすばらしい考えが、若麻呂の頭の中にひらめきました。

「これだ」。

これこそずしの仕上げの金。命あるたからの玉。おさえきれぬ喜びで、若麻呂の顔はかがやきました。あっという間に、若麻呂は、玉虫をつかんだままかけ出しました。まるで、得がたいたからでもぬすんでにげるぬ

すびとのように、たちまち見えなくなりました。

「ぬすびとだ。ぬすびとだ」。

男の子は大声でさけびながら、若麻呂を追いかけました。

その日から、若麻呂の新しい仕事が始まりました。若麻呂は玉虫をつかまえて来てははねをとり、それを、金銅のすかしもようでかざられた、ずしの台ざにはりつけました。いくまいも、いくまいも、しんじゅ貝のようにちりばめました。

今までとらえることができなかった、美しいもののまことのすがたが、玉虫のはねをはりつけたとたんに、ありありと現われました。どんなとうといたからよりも、とうとい、とうとい命あるたからの光。人の力ではおよばぬ美しいもののかがやき。それが、ただひとひらの玉虫のはねにこもっていようとは、た

だもうおどろくばかりです。

今こそ、若麻呂は、かぎりなく美しいものをとらえることができました。しかも、そのかぎりなく美しいものが、自分の目の前にあるということも知りました。美しいものは天上にあるのではなく、あてのないあこがれの中にただよっているのでもなく、わが目の前にあったのです。美しいものは、美しいものを造ろうと思うものの手にはとらえられずに、かえって無心な子供の手に、とらえられるのです。

玉虫をつかまえて来てはずしにはりつけ、玉虫をつかまえて来てはずしにはりつけ、来る日も、来る日も、若麻呂は玉虫をつかまえようと、野山をかけめぐりました。長い竹ざおをかついだ若麻呂が、ある時は高いえのきの木の下で、ある時は林の

中で、見られるようになりました。まっ黒に日にやけた顔に、気味の悪いわらいをうかべて、何やらもぞもぞとうごめいているものをふくろに入れた若麻呂に、森の中で出会う者もありました。

「若麻呂はみょうなことを始めたぞ。」

と、人々は話し合いました。

「まさか気がふれたのではあるまい。」

「いや、どうもおかしい。」

などと、うわさはまたひろがりました。

しかし、若麻呂は、野山をかけ歩くことをやめません。ずしの台ざにすきまなくちりばめるためには、十や二十の玉虫では足りません。何百何千と集めなければなりません。しかも、玉

虫は、そうどこにでもおりません。どうしたら玉虫をたくさん集めることができるかと、くふうもしなければなりません。

若麻呂はなりもかまわず、人のうわさも知らぬげに、玉虫をさがしました。玉虫が、さくらの木に多くいることも、また、木の幹にあまいものをぬりつけておいて、夜になってから見に行けば、玉虫ばかりか、角をはやしたかぶと虫や、くわがた虫

や、かなぶんぶんや、かみきり虫までが、集まっているということも知りました。

こうして、玉虫をさがしまわっているうちに、若麻呂はまた新しいことに気が付きました。今までは、ただ虫けらとしか考えていなかった虫が、虫けらというだけではすまされぬ、ふしぎなものだということに気が付きました。虫などというものは、勝手な所にちらばって、でたらめなことをしているのだと思っていたのですが、そうではなくて、命を持ち、それぞれにいる場所を決め、食べるものにもきまりがあり、おどろくほどのやり方でくらしているのだということに気が付きました。

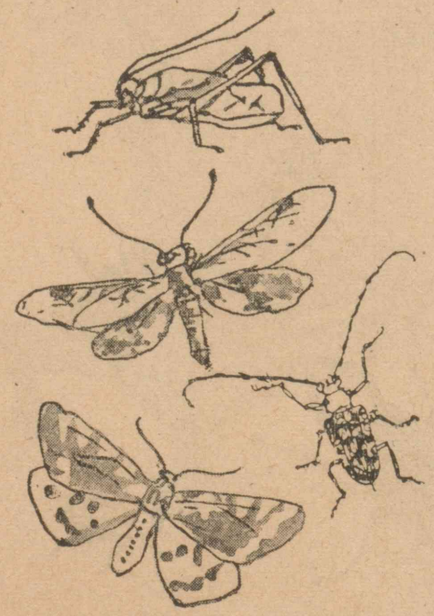
玉虫を集めていると、ほかの虫も見ないではいられません。森にも、林にも、いや、道ばたの草のかげにも、ちりあくたの

中にも虫はいるのですから、いやでも見ないではいられません。せみの子が木の根もとからはい出して、花の開くように、はねをせなかのわれめからひろげていることもあります。また高い高いむくの木のえだにきらりとかがやくものを見つけて、竹ざおをのばしてたたき落すと、くっちゃりと音がして、玉虫とは似ても似

つかぬ、なめくじが落ちて来ることなどもありました。

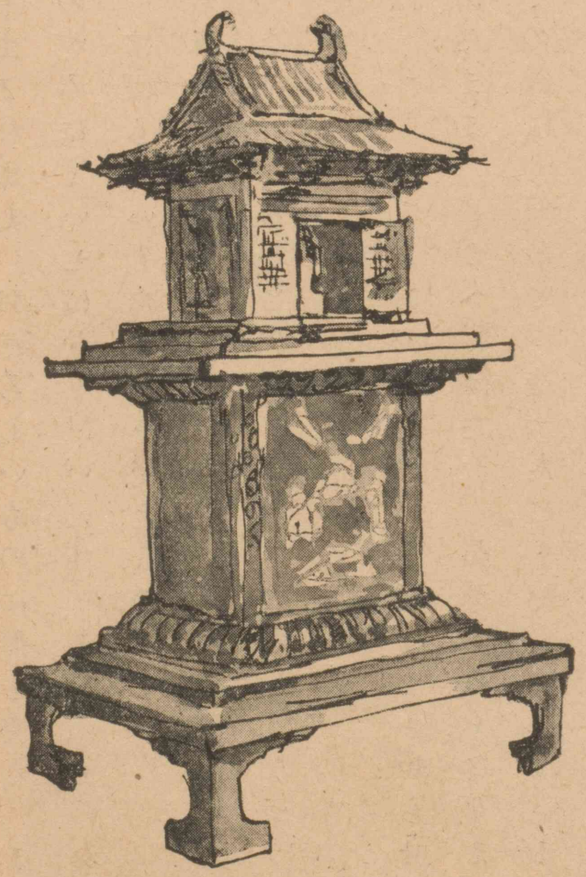
かと思うと、かれ積もった落ち葉の中から頭を出しているきのこにとまって、きのこ虫が、きのこを食べていることもあります。とげだらけな、からたちのしげみの中で、あげはちょうがたまごを産みつけているかと思えば、くりや、くぬぎの、白っぽい葉のうらに、まっ白な毛のはえている、くり毛虫を見ることもあります。

また、はんの木の木かげから、ひらりと飛び出す大きながの水色のはね



の美しさ。指でさわ
ればぶるぶるふるえ
るごまだらちょうの
ふしぎなまゆ。えの
きの幹にとまってい
る大むらさき。道に
落ちた馬ぐそにもと
まる小むらさき。山
深く分け入った時、
けものののほねのくさった上に、黒光りのするえんま虫が、ぎっ
しりとたかっているのを見ることもあります。
ああ、なんと、この世は、ふしぎな、そして美しいものにみ

ちみちていることでしょう。草のかげにも、土の中にも、くさ
った肉や、どろ水の中にでも、美しいものがひそんでいるので
す。しかも、美しいものが美しいとばかりはいえず、みにくい



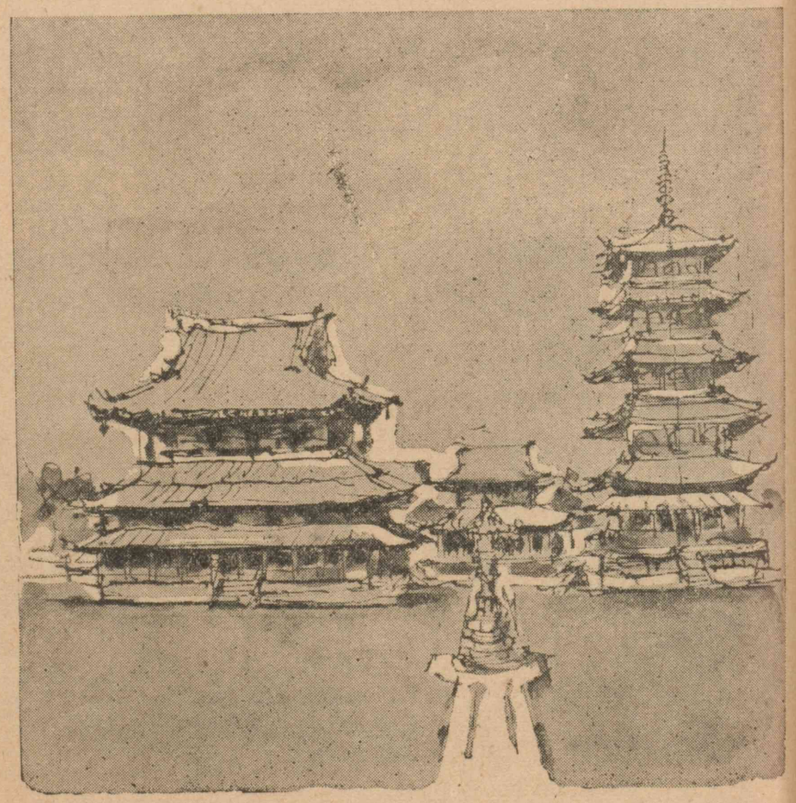
ものからも生まれ出し、おそろしいものに形を変え、また、みにくいものがみにくいとばかりはいえず、美しいものからも生まれ出し、すばらしいものに形を変えるのです。

今こそ若麻呂は、美しいもののまことを見ました。美そのものを、はっきりと見ることができました。ずしはりっぱにできあがりました。

若麻呂は、ずしのできあがったことをだれにも知らせず、ぶいと家を出たまま、どこへ行ったか、わからなくなりました。そして、その後は、何ひとつ造ったとも知られてはいません。こじきのような、ひどいみなりで、しかし、楽しくてたまらないというように、耳無山で子供らと虫をつかまえていたのを見たと言う者もありましたが、それもうわさだけで、出会った者

はありません。

玉虫をちりばめたずしが人々をおどろかし、法隆寺金堂に納められたのは、それからずっとあとのことだといわれています。かすかに残る玉虫のはねをきらめかせ、今も法隆寺に玉虫のずしとして残っています。



(二)　おかぐらのふえ

第一まく

お堂の前　銀次、十さいぐらいの村の子、そまつなしまの着物を着て、手に横ぶえを持って出て来る。銀次はあるじょうずなかぐら師のむすこで、持っているふえはおとうさんがふだんから使いならしていた楽器である。

銀次「死んだおとうさんはじょうずだったなあ。どうしたらあいうふうにじょうずにふけるかしら。あんなにふいてみたいなあ」

と、いろいろふいてみるが、よい音色が出ない。

村の男の子や女の子が大勢出て来る。

（新一、おまつ、勇造らが、先に立っている。）

新一「ごらん、あそこに銀ちゃんがいるよ。君たちはあの子を知っているかい」。

おまつ「ええ、あの子のおとうさんはふえをふくことがじょうずだったでし

よう」。

勇造「そうだ。あの子のおとうさんはかぐら師だったからね」

みんなは銀次のそばへやって来る。

新一「銀ちゃん、君もかぐら師になるのかい。ひとつふいて聞かせてくれたまえ」。

銀次「ぼくにはふけないよ。まだ習わないのだもの」。

新一「習わなくったって、少しぐらいはふけそうなものだね。ぼくにだって少しぐらいはふけるよ　君はふえふきの子じゃないか」。

おまっ「ふいて聞かしてちょうだいよ、ね、銀ちゃん」。

新一「君。よく君のおとうさんがふいたっけ、ね、そら、トッピキピーのピーってのがあるだろう。あれがおもし

ろいよ　あれをふいてみたまえよ」。

銀次「では、やってみようか　ふけるかもしれないよ」。

銀次がふえをふく。しかしちっともよい音色が出ない。へんな音ばかり出る。

「ブーッ、ジューッ、ブーッ、ジューッ、ジュージュージュー、ジュージュー」。

みんなはころげ回ってわらう。

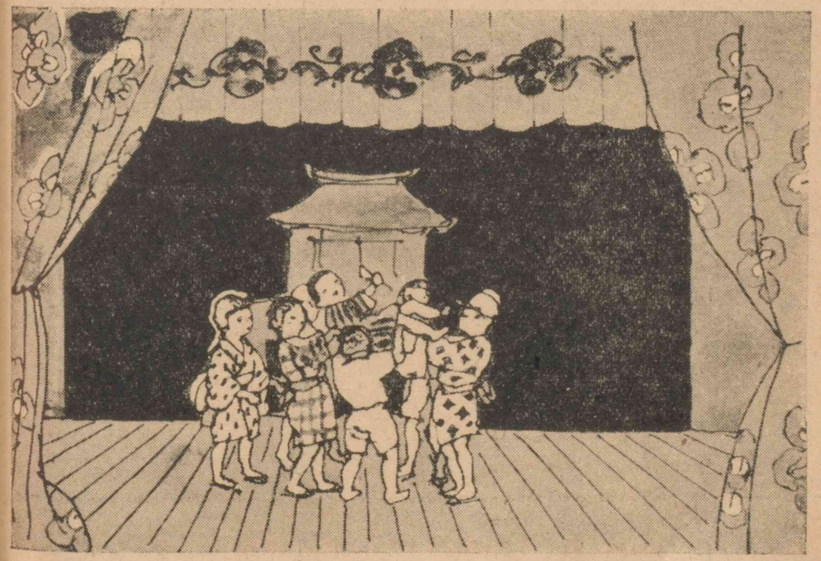
みんな「あはははは。あはははは。だめだ、だめだ。ふえふきの子のくせに、だめだなあ。へんだなあ。あはははは。あはははは」。

新一「人をばかにしているよ。ね、どうあげしてほうり出してやろうよ」。

新一と勇造が先に立って銀次をどうあげする。おまつが留めようとするが、それを追いのけて、大勢で銀次をあちらこちらへ持ち回って投げ出す。

男の子みんな「わあいわあい。わあいわあい」。

と、はやし立てて行ってしまう。女の子



らもいっしょにはいる。銀次はくやしくて声をあげてなく。

銀次「ああ、くやしい、くやしい。おとうさんの生きているうちに、言うことを聞いて習っておけばよかった。ふえをふけば、だれもみんなうかれて、おどり出すようなじょうずなふえふきになりたい。ああ、くやしい、くやしい」。

と、なく。

お堂のとびらが中からあいて、弁天さまが出て来る。

弁天さま（銀次のそばに来て）「銀次や、ないてはだめよ。え、どうしてなくの」。

銀次「ふえがふけないものだから、みんながぼくをばかにし

て、ひどい目にあわしたのです。わあ、わあ。」

と、大きな声でなく。

弁天さま「さあ、もうなかなくてもいいよ。わたしが手伝って、ふくことを教えてあげるからね。おまえはじょうずなふえふきになりたいのかい。」

銀次「死んだおとうさんのように、だれでもみんながうかれておどり出すような、じょうずなふえふきになりたいのです。」

弁天さま「なんでもわたしの言いつけるとおりにしますか。」

銀次「ええ、なんでもします。」

弁天さま「では、わたしについておいで、ふくことを教えてあげますから。そうして覚えたら、あしたからいっしょう

けんめいにおさらいをしなさい。これから一年の間は、一日だってなまけてはいけませんよ。そうすれば、きっとおとうさんのようにじょうずになれます。だれでもおまえのふえを聞けば、ひとりでにうかれて、おもしろがっておどるように

なります。さ、ついておいで。」

弁天さまは森の方へ行く。銀次はそのあとについて行く。

第二まく

場所はおなじ所。時は一年たった後のつもり。

銀次がまたふえを持って出て来る。

銀次「弁天さまに教えてもらってから、もうちょうど一年になった。ぼくは何もかも弁天さまの言われたようにした。あれから一日だって休みはしなかった。自分ではわからないが、少しはじょうずになったかしら。じょうずになったら、それを聞く者は、だれでもうかれて、おもしろがっておどり出すというのだから、だれか来

てくれるといいな。ふいに聞かせてみるのだけどな。(一方を見て)あ、およしばあさんが来るよ。ふいてみようかな。でもあの足つきではおどれそうにもないなあ。」

と、歌口をしめしてふく準備をする。

村のおよしばあさんがえびのようにこしを曲げ、たまごのかごを持って、びっこをひくようによたよたと出て来る。

およしばあさん「やれやれ、やれやれ。ああ、ああ。歩くのはたいへんだよ。こうリョウマチがいたくてはたまらない。」

と立ちどまって、ためいきをする。

「ああ、もうひと足だって歩けやしない。」

銀次がふえをおもしろくふき始める。

およしばあさん（聞きほれて）「ま、なんてよい音色だろう。心がうきうきするよ。おやおや、これはまあどうしたのだろう。（と、だんだんうかれ出して）ああ、もう、じっとしてはいられないよ」。

およしばあさんはひょこすかひょこすかと歩き出して、いつの間にか、ぶきっちょなふうをしながらおどり出す。だんだん身がるに、ゆかいそうにおどり回る。しまいにはたまごのかごをほうり出してしまっておどる。

銀次がふえをふきやめると、ばあさんもすぐにおどりをやめる。そうして苦しそうに、はあはあと大きな息をはいている。

そこへ気むずかしそうな、こわい顔をしたじいさんが、馬に荷をせおわせて出て来る。

じいさん「しっ、しっ。やい、どうした。さ、行け行け。なぜ歩かないのだ」。

と、手に持っている竹で馬のしりを打つ。

馬「ひひひひん、ひひひひん」。

じいさん「しっ、しっ、さ、さ」。

銀次がまたふえをふき始める。

じいさんは通り過ぎたが、すぐ立ちどまる。

じいさん「おや、あれはなんだ。ふえだな。なんて陽気な、おもしろいふえだ。おやおや。これはふしぎだ。ひとりで

に足が上がって、手がおどってくるじゃないか。おや
おや、おやおや」。

銀次はさかんにふえをふく。じいさんは初めのうちは、むずかしいこわい顔をして、いやいやおどるようにしていたが、ふえが調子づくにつれて、だんだんうかれ出し、持っていた竹のむちも、馬のつなも手から放してしまって、うれしそうな顔をしておどりまわる。

およしばあさんもまたおどり出す。

銀次がふきやめると、ふたりもおどりをやめて、同じように、はあはあと大きな息をはく。そこへ前のまくの新一や勇造やおまつやその他の子供がまた出て来る。

おまつ「今のあのよい声はどこから聞えてきたのかしら。わたし、おどり出したくなったわ」。

銀次がまたふえをふき始める。

新一、勇造「ああ、あれだ、あれだ」。

おまつ「銀ちゃんがふいてるのよ。ああ、よい音色だこと。いいわね」。

みんな「おもしろいね」。

子供らもみんなおどり出

す。じいさんも、およしばあさんもまたおどる。馬
までおどりそうにする。荷物がころげ落ちる。馬は
それにかまわず、後足で立って、人間どいっしょに
おどる。ふえをふきやめると、みんなもおどりをや
める。

新一「あれあれ、おばあさん。ごらんなさいよ。かごがひっ
くりかえって、たまごがみんなわれてしまったよ。」
およしばあさん「たまごなんかどうなったってかまわないよ。銀次さん、
おまえさんのそのふえのおかげで、わたしのリョウマ
チはすっかりなおりましたよ。」
おまつ「あら、おじいさん、おまえさんのだいじなむちじゃな
くって、そこに落ちているのは。馬にふまれて、こな

ごなに折れてしまっているよ。」
じいさん「むちなんかいらないよ。もうわしは馬を打とうなんて
気にはなれない。（銀次に）おまえさんのふえを聞いたら、
わしの気もまるで変わってしまったよ。なんだかわか
くなったようだ。人も馬もみんなかわいくなった。」
銀次「おじいさん、馬の荷物が落ちているよ。」
じいさん「もう一ぺんおどってからつけてやるよ。」
みんな「そうだ　もう一ぺん、もう一ぺん、ふいておくれよ。」
銀次がまたふえをふき始める。みんながまたおどり
始める。お堂のとびらがあいて、弁天さまがのぞく。
弁天さま「ほんとにおもしろそうだ。わたしもおどってみたくな
った。」

楽しそうに、みんなのおどりを見ている。

弁天さま「わたしもあのなかまにはいろうかな。さあさあ、もっとおふき、もっとおふきよ」。

弁天さまもいっしょになって、おどりながら森の中へはいっていってしまう。

五　人間とことば

(一)　方言と標準語

みなさんは、おさない子供のことばを調べてみたことがあるだろうか。おさない子供が、どんなふうにしてことばを覚えていくかを調べてみたことがあるだろうか。

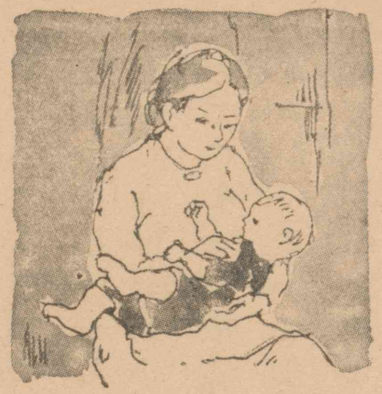
「さとう」をチャトウと言ったり、「茶がま」をチャマガと言ったり、「おもしろい本」をオモシロイノホンと言ったりするのを、聞いたことはないであろうか。

おさない子供は、自分のまわりの人たちの使っていることばを聞いて、それをまねする。しかし、おさない子供は、まだ耳

がなれていないから、そのとおりに聞きとることができない。また、そのとおりに聞きとっても、舌の訓練ができていないから、そのとおり発音できないこともある。だから、もし、みなさんが、おさない子供の口まねをして発音してみると、子供はそれをちがうと言って承知しないことがあるであろう。子供としては、おとなと同じ音で発音しているつもりなのだが、まだなれていないために、実際に発音する時になると、まちがってしまうのである。

「茶がま」をチャマガと言ったりするのも、子供にとっては、チャガマよりもチャマガの方が言いやすいために、まちがってしまうのであって、だんだん訓練が積むと、正しくチャガマと言えるようになる。

「おもしろい本」をオモシロイノホンと、「おもしろい」と「本」との間に「の」を入れたりするのは、「ぼくの本」とか、「君の本」とかいうような言い方があるので、その言い方を覚えて、入れなくてもよい場合にも「の」の字を入れたものである。



しかし、こういう覚えちがい、言いちがいは、おとなが注意してやるのでなおっていく。また、注意しないでも、おとなのことばをしじゅう聞いているうちに、自然になおっていくものである。

子供が初めに覚えることばは、自分のまわりの人たちのことばであるから、たとい日本人であっても、外国で生まれ、まわりの人たちが外国語を使っている所で育つと、外国語を覚えて

しまう。逆に外国人でも、日本で育った者は日本語を覚えてしまう。

子供のまわりに行われていることばは、その土地のことばである。ところが、同じ日本語であっても、土地土地によって、少しずつことばがちがっている。この土地土地のことばを方言というが、子供は、初めに方言を覚えるのである。

東京で育った者が、「火ばち」をシバチと言ったり、「落ちる」をオッコチルと言ったり、「みつかる」をメッカルと言ったりすることがある。シバチ、オッコチル、メッカルなどというのは、東京の方言なのであって、こんなことばを使うと、ほかの土地の人は、何のことかわからないかもしれない。また、おかしくなってわらうかもしれない。

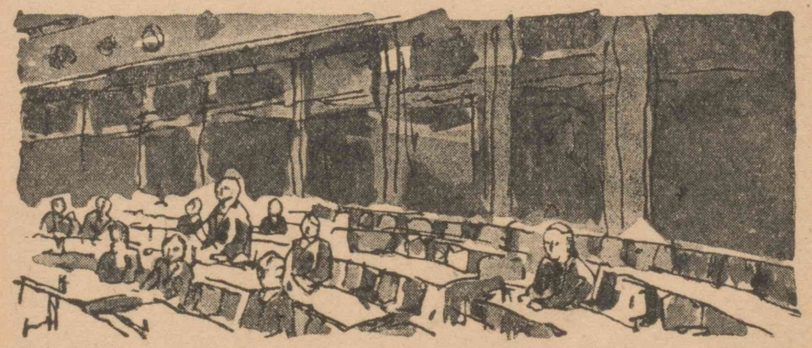
このように、同じ日本語でありながら、土地土地でことばがちがっていると、ちがった土地の人がおたがいに話をするのには、不便が起ってくる。そこで、どうしても日本じゅうの人みんなにわかるようなことばが必要になってくる。私たちは、学校に行くと、日本じゅうの人たちみんなで使うことばを学ぶ。このことばは、標準語といわれるものである。

自分の家族の人たちや、土地の人たちと話をする時には、方言を使ってよいが、ほかの土地の人と話をしたり、大勢の人の前で話をしたりする時は、どうしても標準語を使わなければならない。みなさんは、大きくなってから、代議士になって、国会で日本の国の大事なことがらを相談し合うようになるかもしれない。代議士は、方々の土地から選び出されて来るのである

が、代議士が、みな、方言で話したのでは、おたがいの気持を十分に通じ合うことはできないであろう。

標準語は、だいたい、東京のことばが土台になっている。しかし、東京のことばそのままではない。

だから、東京の人でも標準語をしっかりと学びとる必要がある。シバチとか、オッコチルとか、メッカルとかいうような言い方をしないで、正しくヒバチ、オチル、



ミツカルと言うようにしなければならない。

(二) 新しいことばと外来語

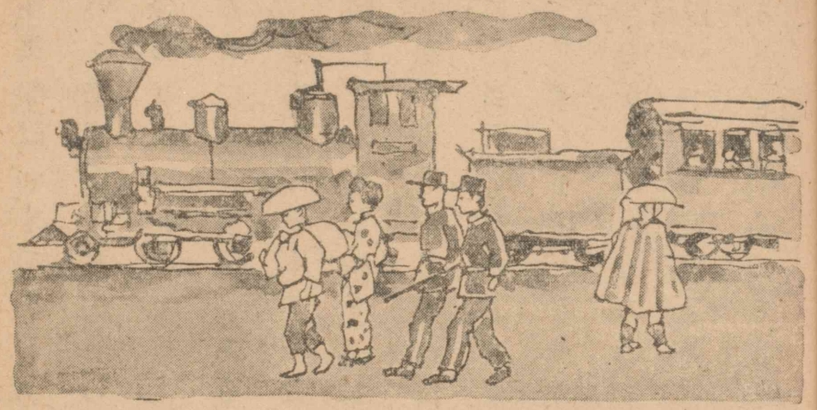
みなさんは、一日じゅうことばを使わないでいたことがあるだろうか。ロビンソン・クルーソーのように、ただひとりはなれ島でくらすようなことでもなければ、ことばを使わないですますことはどうしてもできないであろう。ふたり以上の人が集まっていれば、おたがいの気持を通じ合うために、どうしてもことばがいりようであり、ことばを使うようになるのである。

からだのどこかがいたむような時、そのいたみを人に知らせるのに、あなたは「いたい。」と言うであろう。それを聞いた人は、「どこがいたむの。」と聞いてくれるにちがいない。あなたは、も

し頭がいたければ、「頭がいたい」と言うであろうし、おなかがいたければ、「おなかがいたい」と言うであろう。「いたい」「どこがいたいの」「頭がいたい」「おなかがいたい」みんなことばである。

朝、人と出会った時、ただ頭を下げておじぎをしても、あなたの気持は相手に通じるであろうが、もし、ことばを使って「おはよう」と言えば、あなたの気持は、いっそうよく相手に通じるにちがいない。

このように、ことばは私たちの生活と、切っても切れない深い関係にある。そうして、私たちの生活が進み、豊かになっていけばいくほど、それにつれて、たくさんの新しいことばが必要になってくる。



あなたは、おさない子供の喜ぶおもちゃで、「がらがら」といわれるものを知っているであろうか。あのおもちゃが新しくできた時、そのおもちゃが、ガラガラという音を立てるところから、その音をとって、「がらがら」という名を付けたのである。

汽車が日本で初めて走ったのは明治五年であった。この新しくできた汽車を、その当時の人々は「おかじょう気」とよんだそうである。汽車ができる前に、同じようにじょう気を使って走るじょ

う気船は、すでにあった。そこで、おかの上を走るじょう気という意味で、「おか」ということばと「じょう気」ということばを組み合わせて、「おかじょう気」と言ったのである。新しいことばを作る時には、前からあることばを組み合わせて作ることが多い。

私たちは日本の国に住んでいる。この日本の国が、世界の国と全くはなれているということはできない。そこで、自然に、外国の考えや品物がはいって来る。この考えや品物といっしょに、当然、その名もはいって来る。この外国のことばからはいって来たものが外来語である。

むかしは、となりの国の中国から、いろいろの考えや品物がはいって来たので、自然、中国のことばが日本にはいって来た。「うめ」「うま」「ふで」なども、もとは中国語であったといわれるし、

「礼」「駅」「修行」「下流」「普請」なども、中国語からはいったものである。

近ごろでは、英語からはいったことばが多い。たとえば、

シャツ　オーバー　ナイフ　フイルム　ミシン　ハンケチ

バケツ　カーテン　ストップ　スポーツ

など、いくらでもあげることができる。ことにスポーツに関するものに多い。

英語ほどではないが、ドイツ語やフランス語からはいったものもある。

ガーゼ　スキー　ドクトル

などは、ドイツ語からのものであり、

マント　デッサン　レーヨン

などは、フランス語からのものである。

オランダ語からはいったものもある。

ブリキ　ゴム　ポンプ　ガス
ガラス　コーヒー　アルコール

などは、オランダ語からのものである。江戸時代には、主としてオランダと貿易したので、自然、そのころオランダ語がたくさんはいったのであった。

また、もう少し前の室町時代の末には、ポルトガルの人々が日本に来たので、そのころポルトガル

語がはいって来た。

タバコ　ボタン　ラシャ　パン
カルタ　カステラ

などは、みんなポルトガル語からのものである。

このように、新しい考えや品物ができたり、また、外国から、今まで日本になかった考えや品物がはいって来たりすると、それを表わすために、新しくことばが作られたり、外国のことばから借りたりして、ことばは、だんだんふえていく。

(三)　学生のことば

みなさんは、おとうさんやおかあさんたちの使わないようなことばを使っていないだろうか。みなさんだけにしかわからないようなことばを使っていないだろうか。「てんでうまい」などというようなことは言わないであろうか。

「てんで」ということばは、ふつうは、てんでできない」。「てんで動かない」。のように、終りに「ない」ということばがあるような場合に用いられるものである。それを、「ない」ということばが終りにこない場合にも使うのは、近ごろ始まったことで、どうも、学生の間からはやり出したもののようである。

人里を遠くはなれたさびしい土地での話であるが、まだこと

ばを十分に覚えていないふたりの子供があった。親たちは仕事に出かけてるすになりがちなので、ふたりの子供だけでしじゅう遊んでいたところ、いつの間にか、ふたりの子供は、親たちには少しもわからないようなことばを作り出して、話し合っていたということである。

しじゅう、いっしょになってくらしている人たちの間では、ほかの人にわからないことばを作りあげてしまうのはありがちのことで、学生などの間に、変わったことばや言い方が使われるのも、この理由からである。しかし、そういうことばをあまりたくさん使うと、ほかの人にはわからなくて、めいわくをかけることがある。私たちは、できるだけふつうのことばを使って話すように、心がけなければならない。

六　新しい世界

(一)　先生の手紙

この間はお手紙ありがとう。ちょうど日直の時でした。小使さんが、「先生、手紙です。」と言うので、どこから来たのだろうと受け取ってみると、うわ書きの字で、君たちからの手紙だということがすぐわかりました。やりかけた仕事もわすれて、次から次へ読んでいきました。

君たちも、いよいよことしで小学校を終るわけですね。私が君たちの組を受け持ったのは、二年生の

時からでしたが、そのころはまだ君たちも小さくて、寒い時などは、手がかじかんで字が書けないと、なきそうな顔をしていた人もあったのに、思えば早いものです。きょうは一年ぶりに、君たちの教室に出て話をするような気持で、ゆっくり返事を書きたいと思います。

去年の春、お別れの遠足に行った時のことを、君たちもよく覚えているでしょうね。山の上から見おろしたあの野原の景色を、私は今もわすれることができません。あたたかな光につつまれて、どこまでも続く緑の野。その中に、菜の花畑とれんげ畑とが入り交って、なんともいえない美しさでした。先頭

をきって登っていた今村君が、まっさきにこの景色を見て、「やあ、すばらしいなあ」と言って、手を上げたまま、じっと見つめていたすがたが、今もはっきりと目に残っています。

私はああいう景色を見ていると、心にどんなわだかまりのある時でも、どんな悲しみのある時でも、いつかなごやかな心になってくるのです。そして、新しい元気が、どこからともなくわいてくるのです。

草の緑は、それ一つを取り出した時には、美しさということからいって、花におとるかもしれません。しかし、野原が、ただ一面に黄色の菜の花畑ばかりだとしたら、人はこれを本当に美しいと思うでしょ

うか。花は、草の緑がそえられて、初めてひきたつのです。また草の緑も、花とならぶ時、ひときわはえて見えるものなのです。また、この花も草も、一つ一つを取ってみると、すべてが美しいとは決まっていません。形の大きいもの、小さいもの、形のととのっているもの、いないものなど、いろいろあります。けれどもそれが一つになると、あの美しさを作り出すのです。私には、美しい自然のこのすがたが、本当に尊く思われるのです。

私は、世の中のことも、こうしたものではないかと思います。

世の中には人間が大勢住んでいますが、その能力

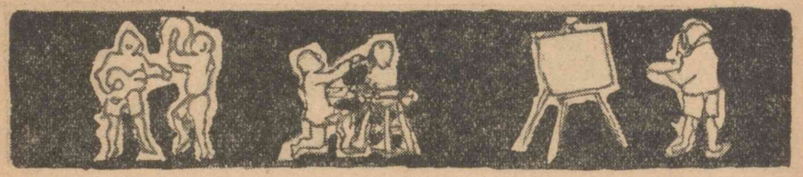
は、決してみんな同じではありません。ある人はからだがじょうぶで、いくらでも力仕事にたえられるし、ある人は手先がきようで、細工がじょうずであったり、またちえがすぐれて、心を使う仕事に適していたり、全く十人十色ということわざのとおりです。人々のこのみにしてもそうです。だれでもあまいものがすきだというのではなく、中にはきらいな人さえあります。しかし、それでいて、こういう人人の集まっている世の中は、一つにまとまったりっぱな働きをしているのです。これはどういうわけなのでしょうか。君たちは、もう社会科の勉強でよくわかっているだろうと思いますが、一口に言えば、

人々の能力もこのみもそれぞれちがっていて、だれひとり同じではありません。それでめいめいが、自分にないものをたがいに求め合って一つにまとまるのです。たとえば、力は強いがきようではない人は、力は弱くてもきような人といっしょにならなければ、こみいった仕事はできないし、また、ちえのある人の助けをかりなければ、りくつに合うような物事をやりとげることはできません。人は、どんな仕事でも、大勢が集まって能力を出し合わなければ、なしとげられないのです。

君たちはここで、もう一度、あの美しい春の野原のことを思い出してください。いろいろの花も、草

の緑と入り交って、初めて、あのすぐれた美しさを表わしているのでした。人間の世界も、これと同じことなのです。いろいろと性質のちがった人の働きが入り交って、初めて美しく楽しいものになるのです。それですから、人はそのすきな道を選べばよい、それによって、人は、美しい世界の創造に参加することができるのです。

なお私は、ここで一言、言いそえたいことがあります。あの春の野は、あたたかい光につつまれていました。草も美しい、花も美しい、しかしそれらは、あのやわらかな光につつまれて、なごやかな調和した美しさ、何ものをもその中にとかしこまずにはお



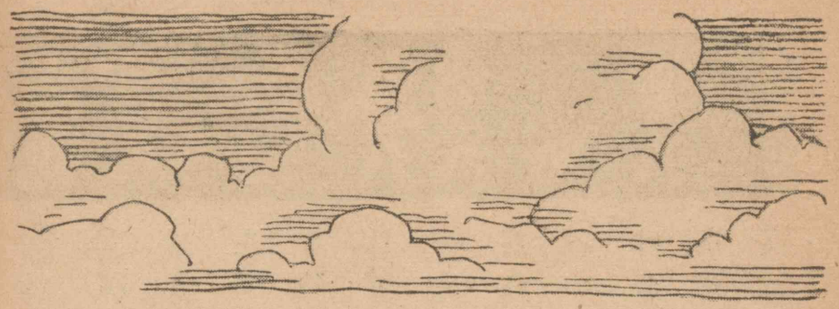
かない美しさを作り出していました。この尊い光は、人間の世界にあっては何にあたるのでしょうか。私はそれを愛だと思うのです。人々が、たがいに愛し合いながら仕事をする時、そこに初めて、すべての人にとって住みごこちのよい、楽しい世界ができあがるのです。人々が、どれほど仕事に精を出したとしても、そこに愛の心がない時には、つまらないことにねたみの心が起り、ささいなことにくしみの心がわいてきて、毎日の生活がふゆかいになってきます。私たちにとって大切なことは、この愛の心なのです。人々が、あたたかい愛の心につつまれて、助け合いながら、めいめいの仕事に精を出す、考え

ただけでも、楽しいことではありませんか。

私は、これが人間の本当の生活ではないかと思うのです。世界の国と国との間がらにしてもそうだと思います。人がちがえば考えもちがい、能力もちがうように、国がちがえば、いろいろと事情がちがいます。しかし国と国とが、その国々のすぐれたところをいよいよ表わすように努力すれば、たといわずかでも、世界の進歩に力をつくすことができるのです。しかし、そこに愛の心がない時は、つまらぬ誤解も大きな争いのもとになることがあります。それは人間にとって大きな不幸です。私たちは、ひとりひとりがなごやかな愛の心をもって、たがいに助け

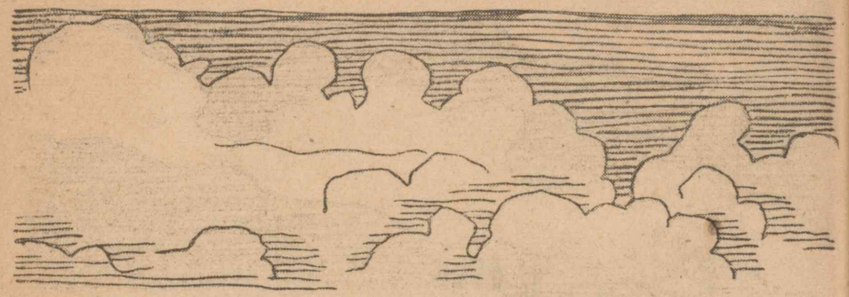
合って行く理想的な世界を造るように、努力しようではありませんか。

きょうはいろいろのことを書きましたが、わかったでしょうか。君たちは、もう間もなく小学校を終るのです。これから三年間の勉強で、自分の本当の性質や能力を見いだして、十分にそれをのばすことが大切だということ、この世に生まれている人は、だれでもこの世になくてはならぬ大切な人であるということ、そして、だれも心からの愛をもって、助け合って行かなければならぬということを、しっかりと知ってもらいたいものです。



(二)　心に太陽を持て

心に太陽を持て。
あらしがふこうが、雪がふろうが、
天には雲
地には争いが絶えなかろうが、
心に太陽を持て。
そうすりゃ、何がこようと平気じゃないか。
どんな暗い日だって、
それが明かるくしてくれる。



くちびるに歌を持て、
ほがらかな調子で。
毎日の苦労に
よし心配が絶えなくとも、
くちびるに歌を持て。
そうすりゃ、何がこようと平気じゃないか。
どんなさびしい日だって、
それが元気にしてくれる。

他人のためにも言葉を持て。
なやみ、苦しんでいる他人のためにも。

そうして、なんでこんなにほがらかで
いられるのか、
それをこう話してやるのだ。
くちびるに歌を持て。
勇気を失うな。
心に太陽を持て。
そうすりゃ、なんだってふっ飛んでしまう。

至 (9)
歯 (12)
徳 (13)
候 (13)
単 (13)
効 (14)
能 (14)
営 (14)
祖 (14)
聖 (15)
師 (17)
余 (18)
妻 (18)
提 (34)
帳 (35)
率 (55)
老 (57)
需 (61)
貿 (62)
易 (62)
輸 (62)
帯 (63)
液 (71)
求 (78)
仏 (78)
納 (78)
推 (84)
皇 (84)
創 (144)

勉強の手引

一　ふるさとの秋

(一)　利根川のせの音

(1)　この文章を読んで感じたことを、みんなで話し合ってみましょう。

(2)　この文章には秋の花のことが書いてありますが、秋の花にはどんなものがありますか。知っているだけ帳面に書いてみましょう。

(3)　次のことばのわけを考えてみましょう。

○いろいろにさきみだれて

○そうそうとひびく

○心をすまして聞く

(4)　書き方のけいこをしましょう。

○雑木林

○飛びながら鳴く

○楽しい

(二)　北国の秋

(1)　北国のふるさとの秋のことが美しい文章で書かれてありますね。この文章を読んで感じたところを、いろいろ話し合ったり、文に書いたりしてみましょう。

(2)　この文章の中にある三つの歌を、静かに声を出して読んでみましょう。そうして、漁師の子供たちの心持をあらわした歌のような歌が、もし作れたら作ってみましょう。

(3)　次のことばを使って、それぞれ、短い文を帳面に書いてみましょう。

○しみじみと

○ゆめのように

○言いようもなく

(4)　次のことばのわけを考えてみましょう。

○散在した

○墓参りの道すがら

○予感

○なすの初なり

○おもむきを変える

(5)　書き方のけいこをしましょう。

○不順な気候

○格別のうまさ

○効能

○伝説

○漁師

○水平線

○真夏

○深い雪の底

(三)　小柿

(1)　次のことばのわけを考えてみましょう。

○進退きわまった形

○いくじがない

○ほっとむねをなでさする

(2)　次の文はどうちがうか、考えて言ってみましょう。

○小つぶな実が黒すんでくる。

○小つぶな実が黒くなってくる。

二　私たちの図書館

(一)　私たちの図書館

(1)　この文章を読むと、自治会のようすや、委員の仕事のやり方などがよくわかります。あなたの組のやり方と比べて、どんなことを感じましたか。

(2)　図書の分類の仕方について、あなたの考え

を話してみましょう。

(3) あなたの組の人たちの読んでいる本を調べ、種類で分けてまとめてみましょう。

(4) 読書週間のために、あなたもポスターを考えてかいてみましょう。

(5) 書き方のけいこをしましょう。

○順序
○研究した結果
○都合がよい
○自治会
○教室
○賛成
○委員
○提案
○整理
○分類
○希望

(6) あなた方も学校の図書館のことについて、みんなで相談してみましょう。

(二) 書物の話

(1) 私たちはどんなに本のおかげを受けているか、話し合ってみましょう。

(2) 「生きた本」とは、この文章ではどんなことですか。その「生きた本」の不便なことや正確でないことを話し合ってみましょう。

(3) 「生きた本」から今のような本になるまでの発達の順序を、まとめてみましょう。

(4) 印刷術の発明は、私たちの生活の進歩に、どんなことをしたか、話し合ってみましょう。

(5) 書き方のけいこをしましょう。

○進歩した機械

○理解
○正確
○印刷
○内容
○記録
○勉強
○無知であった

三 作られるまで

(一) 茶

(1) あなたはこの「茶」の文章を読んで、どんな感想を持ちましたか。帳面に書いてみましょう。

(2) ぎょくろができあがるまでの順序を、表にまとめてみましょう。

(3) 書き方のけいこをしましょう。

○大量生産
○緑茶
○紅茶
○需要
○消費
○速度
○夏季
○貿易
○輸出面

(4) 次のことばのわけを考えてみましょう。

○能率
○農閑期
○節分
○ぎょくろ特有の味
○ほいろ師
○独特の高いかおり
○手工業

○めまぐるしく動く時代
○薬学的

(5) この文章は十のだんらくからできています。だんらくごとにどんなことが書いてあるか、調べて帳面に書いてみましょう。

(二)

(1) 製紙工場にはどんな機械があるか、この文章から書きぬいてみましょう。

(2) この文章を読んで、この製紙工場にへやがいくつあるかわかりましたか。わかったらそのへやにあなたの考えで、へやの名をつけてみましょう。

(3) 次のことばのわけを調べましょう。

○電気
○電力
○水分
○水
○大発見
○大発明

(4) 書き方のけいこをしましょう。

○案内
○新聞紙
○質問
○石炭
○輪転機
○教科書

(5) できたら、ほかの物について、それが作られるまでのことを作文に書いてみましょう。

四 美しさを求めて

(一) 玉虫のずしの物語

(1) あなたはこの物語を読んで、若麻呂のどんなところに感心しましたか。それを帳面に書

いてみましょう。

(2) 若麻呂が美しいずしを作ろうとして苦心したようすを、この文章の中から書きぬいてみましょう。

(3) 「美しいものを求めようとすればするほど、美しいものは手のとどかぬ所へ遠のいて、星のようにかがやくばかりです。」とありますが、これはどうしてそうなのでしょうか。みんなで考えて、話し合ってみましょう。

(4) 若麻呂は、りっぱな玉虫のずしを造り上げたまま、だれにも知らせず家を出てどこへ行ったかわからなくなったのは、どうしたわけでしょうか。考えてみましょう。

(5) 次のことばを使って短い文を書いてみましょう。

○あざやかに
○とたんに
○見れば見るほど
○来る日も来る日も
○花の開くように

(二) おかぐらのふえ

(1) ふえのふけなかった銀次が、じょうずにふけるようになったのは、銀次のどんなどころがえらかったからでしょうか。みんなで話し合ってみましょう。

(2) このげきの中で、どこが一番おもしろいところかを考えて、帳面に書いてみましょう。

(3) えびのようにこしのまがったおばあさんや、気むずかしそうな、こわい顔をしたおじいさんが、銀次のふくふえの音でおどりだしたのはどうしてでしょうか。話し合いましょう。

(4) みんなで相談して、配役を決め、「おかぐ

らのふえ」のげきをしてみましょう。

五　人間とことば

(一)　方言と標準語

(1)　おさない子供のことばを調べて、おもしろく思ったことを発表しましょう。

(2)　標準語とはどんなことばでしょうか。なぜ標準語が大切なのでしょうか。かんたんにまとめてみましょう。

(3)　あなたの住んでいる土地のことばから、標準語とちがっているものをさがし出して発表しましょう。

(4)「舌の訓練ができていない。」とはどういうことでしょうか。帳面に書いてみましょう。

(二)　新しいことばと外来語

(1)　新しいことばは、どんなにして作られるのでしょうか。二とおり書いてみましょう。

(2)　外来語は、どんなにしてわが国にはいって来たのでしょうか。

(3)　あなたの知っている外来語をたくさん集めて、表にしましょう。

(三)　学生のことば

(1)「てんでうまい」というようなはやりことばを、あなたがたは使っていませんか。使っていたら、それを帳面に書いてみましょう。

(2)「はやりことばを使ってよいかどうか。」という題で、討論会をしてみましょう。

六　新しい世界

(一)　先生の手紙

(1)　この文章は、一年前にわかれた先生からの手紙ですね。あなたはもうすぐ小学校を終えて、四月からは中学生です。中学生になったらどうしたらよいか、そのことについてこの

文章がはっきり教えています。おちついて、静かに読んでみましょう。

(2)　この文章のだんらんごとにどんなことがあるかを調べて、帳面に書いてみましょう。

(3)　この文章を読んで感じたことを話し合いましょう。

(4)　次のことばのわけを考えてみましょう。

○日直
○うわ書きの字
○先頭をきって登る
○心のわだかまり
○能力
○手先がきようです
○十人十色
○美しい世界の創造
○調和した美しさ
○ねたみの心
○理想的

(二)　心に太陽を持て

(1)　いよいよ小学校での最後の課になりましたね。この詩が何をあなたに教えているか、しっかり読みとってみましょう。

(2)　よい詩はいくども読んで、そらで言えるまでにならなければなりません。そして、ときどき思い出して口ずさむようにならなければなりません。声を出して、何べんも読んでみましょう。

(3)「心に太陽を持て。」とこの詩が言っていますが、「太陽」とは何でしょうか、よく考えて話し合ってみましょう。

(4)　この詩を読んで、どんな感じを持ちましたか。みんなで話し合ってみましょう。

編集にたずさわった人

監修者　学士院会員　芸術院会員　柳田国男

編集委員　東京教育大学教授　岩井良雄

国立国語研究所員　岩淵悦太郎

民俗学研究所理事　大藤時彦

東京杉並第四小学校校長　上飯坂好実

山梨大学教授　鳥山榛名

東京学芸大学助教授　橋本芳一郎

東京学芸大学助教授　望月久貴

東京書籍株式会社編集部

さしえ　吉岡憲

装てい　山下大五郎

新しい国語　六年下　（小学校第六学年後期用）　小国六一〇

昭和二十六年五月一日　印刷
昭和二十六年六月一日　発行
（昭和二十四年十月十日　文部省検定済）

定価　円

著作者　東京書籍株式会社編集部　代表者　藤田貞次

発行者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式会社　代表者　山田三郎太

印刷者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式会社　代表者　山田三郎太

Approved by Ministry of Education
(Date　　)

発行所　東京書籍株式会社

（出版権の設定登録及び表紙の意匠、装てい登録中）

広島大学図書
0130449923

東京書籍株式会社